一橋大学陸上競技部史

（自大正十二年　至昭和二十二年）

一橋大学陸上競技部史

（自大正十二年
至昭和三十三年）

一橋大学図書館（国立）

創部70周年祝賀会に於ける尾本会長

（平成5年11月20日　於 如水会館）

創部70周年祝賀会に於ける都留名誉会員（元部長）

（平成5年11月20日　於 如水会館）

巻頭のことば

一橋陸上競技倶楽部
会長　尾本信平
（昭和8年卒）

「夕焼けこやけの赤とんぼ―」とテレビが歌っている。その時，私の頭に途端に学生時代の競技部合宿時代の風景が浮かんできた。確かこの歌もその頃，すなわち，昭和4・5年頃流行りだしたものなのであろうが，7，80年も過ぎた今日でも名曲として私達老人の頭に鮮やかに浮かんでくるのである。また，麻雀も多分その頃学生仲間に流行りだしたのであろう。雨で練習等できない日は，合宿内でも盛んにやっていたのが思い出される（もちろん賭け麻雀では全くないが…）。そして雨が上がり，ウォーミングアップを揃って走り出したとき，一羽の鳥が空を飛ぶのをみて，「あゝイーソが飛んでいる」と誰か一人が大声で叫び，皆大笑いをしたことも60数年前の懐かしい思い出の一つである。

こんなことを懐かしく思い出していると，たまたま松永宣夫幹事長（昭和34年卒）より電話が入り，この『70周年記念号』に巻頭言を書くようにと連絡があったのである。そこで私は早速この記念号の担当幹事である阿部湘一郎君（昭和29年卒）に電話して，出版準備はどうなっているか問い合わせてみた。ところがなかなか古い記録が集まらなく苦心しており，神戸商大や名古屋高商の先輩にまでいろいろ協力を依頼しているところであるとの返事であった。

なるほど，このような競技部の記念号としては，競技記録が最も大事なものであるとは思うが，それにも増して老人の我々の脳裏に強く浮かんでくるものは，一緒に走った部員の姿・顔であり，また，いろいろの出来事等なのである。特に競技そのもの以外に，若き日の情熱を傾けつくした出来事については，その関係者にとってその情景が歴然と思い出されるし，またこのような記念号の度に，記載されて後世に残していただきたいものと思うのでもある。それは丁度，赤とんぼの歌が今でも『ナツメロ』の一つとして歌われ，感動を与えている

ように。

阿部前幹事長のいうように，この記念号が過去の競技記録を完璧に記載されないにしても，また，この記録の中に全日本的に誇るべき記録がないとしても，記録以外に後世に残すべき，あるいは社会的に誇るべき出来事があるとすれば，それはこの記念号の価値を十分高めることになるのではなかろうか。このような出来事についても本記念号には，いろいろと記載されておるとは思うが，私の脳裏に浮かぶ次のような出来事もその概要・要点だけでもここに掲げて置くことにしたい。

その第一は，現在の日本学生陸上競技連合すなわち，学連の創立前後の頃についてである。それは，確か3・4年頃だったと思うが，当時学部におられた川本信正氏（昭和6年卒）及び故後藤文雄氏（昭和6年卒）の両氏が学部の1・2年の頃であり，ほとんど教室には顔を出さず，全力をあげてその組織運営事務に忙殺されていたことである。私は当時石神井の予科におり，どうしてこの二人が練習にも来ないのか不審がっていたことを思い出す。川本氏にお電話すると，当時関東・関西・九州等それぞれ独自の学生大会があり，これを全国的に統合しようという運動が京都帝大より起こり，関東では農大がこれに応じ，昭和3年にその第1回全日本大会を開くことになったのであり，川本氏はその会計・秘書として，その中心的存在として活躍したようである。後藤氏は主として関東学生の方を担当していたとのことである。

次に戦前の大きな出来事としては，全国高等商業学校陸上競技大会の結成と，その主催であろう。その頃は東京・京都両帝大の主催による全国高等学校（旧制）の陸上競技大会の開催はあったが，高等商業や高等工業の全国的大会はなかったのである。そこで当時予科にいた私は，予科としてこの高校大会に参加を運動したが成功せず，「よし，それでは」という反骨精神もあって，学部になってから文部省とも交渉し，ついに昭和7年全国高等商業学校大会を国立において開催することに成功したのである。その発会式には鳩山文部大臣の臨席を仰ぎ，全国の20校余りの選手等が兼松講堂に集まり，その輝かしい前途を祝したので

ある。なお，この大会は，当時の東京商科大学の佐野学長及び高瀬荘太郎教授（陸上競技部長）の絶大なるご支援もあったが，当時の部員，特に故田中忠平君（昭和8年卒）・故金子珪介君（昭和9年卒）・故上田重昌君（昭和9年卒）・故間瀬正君（昭和9年卒）等の懸命な努力を忘れてはならない。主催は東京・神戸両商大であったが，その創設については東京商大が全面的にこれを行ったといってよろしいと思う。

また，このことによって国立競技場（国立）が，東京における数少ない何番目かの公認競技場となったことも忘れてはならない。このことも当時の部員達が大変な苦労をし，トラック改造・計測や諸設備の充実などに献身の努力をしたことを記しておかねばならない。

さて戦後の出来事の中の大きなものは，合宿所の建設であったと思う。戦後の学生部員の宿舎については，なかなか容易ではなく，故吉見泰二幹事長（昭和11年卒）の発案により，国立に合宿所を建築することになったのである。詳しいことは，その合宿所に寝起きした渋谷鋭市君（昭和28年卒）が本書に記載してあるはずと思うが，その土地買収費は当時の倶楽部会長故水上達三氏（昭和3年卒）より借入，建物は昭和鉱業の職員宿舎を寄付してもらい出来上がったのである。この合宿所によって多くの学生部員が育ったのであるが，その後，これを大学キャンパス内に新築移転しようと考え，故小林主副会長（昭和9年卒）等が設計図まで引くほどの努力をしたが，ついに大学当局の許可が得られずこれを断念し，合宿所敷地は売却し，借入金を返済して残金を倶楽部の基金とすることとしたのである。この基金を元としてその後，倶楽部員からの寄付金及び内藤藤三君（昭和38年卒）等の努力による利殖により，今ではこの基金は，6000万円の巨額に達しており，現役部及び倶楽部活動の大きな支援の源泉となっておることも大切なことであったと思う。

さて陸連，すなわち日本陸上競技連盟財政事情についてであるが，現在では同連盟では10億円以上の基金をもち，財政的には極めて安定した状態にある。このことについても，我が一橋陸上競技倶楽部のメンバーが，大いに努力した

結果であることも付記しておいてもよかろうと思う。

すなわち，それはローマオリンピック前の頃であったと思うが，陸連の青木半治氏の要請により，陸連の財務担当理事を一橋として引き受けるように言われ，私がそれを引き受けたのであった。詳しいことは別として，私の実行した改革は，当時現金出納しかやっていなかった会計を，貸借対照表的会計に改め，過去の負債を明確に把握できるようにしたこと，選手権大会その他各種の行事ごとの固有の収入・支出を行事ごとに対照せしめたことによる赤字の源泉を明確にさせたこと，雨天による収入減を防ぐため入場券を束にして大手企業に前売りしたことなのであり，また，東京オリンピックの機会に，できるだけ記念品を販売し収入を計ったこと，さらに，オリンピック後の残余金をもって負債を精算し，残り1億円をもって電話公債・興銀債などを利用し1億円の基金を設立し，さらにこれをもって，財団法人にまで漕ぎ着けたことであった。その後，我が倶楽部員より故小林主君・故吉見泰二君・高橋保君（昭和25年卒）・阿部湘一郎君（昭和29年卒）等が私の後を継ぎ，その方針を貫き通した結果，今では，その内容は極めて堅実なものとなっているのも，一橋陸上競技倶楽部として喜び，誇りとしてもよろしいのではなかろうか。

以上巻頭のことばとしては，長すぎたかも知れないがお許しを願いたい。ただ私としては本書は年報ではなく，数十年を振り返っての記念号であるので，その間における大きな出来事を回想し，現役の部なり先輩の倶楽部の歴史に意義のあると思う点を，記載してみたわけである。それにしても70年という期間は余りにも長すぎ，読んで共感をしてくれる先輩たちも大分故人となっており，この記念号はやはり50周年に一度出すべきであったという感じが深い。もっとも太平洋戦争及びその後の混乱もあり，言うべきして行われなかったことではあるが。

こんなことから考えてみると，今後は毎年の部報の他に，10年あるいは20年毎の節目節目に，このような記念号を企画することにしておきたいと思う。

発刊に際して

名誉会員　都留重人

一橋大学陸上競技部が1923年に創部され，ここに1958年までの35年間の歴史を第一部として刊行されることに，私は心からの祝意を申し述べたい。先ごろ，日本陸上競技連盟が1925年発足以来の『70年史』を上梓されたが，これよりも更に2年さかのぼって古い記録業績を再生する御努力は大変だったろうと思う。

1923年といえば，私が尋常小学6年生のとき，たまたま猩紅熱をわずらって，その余病だった腎臓炎で足掛け3年にわたる入院生活を余儀なくされ，旧制中学におくれて入学してからも，3年生になるまでは体操と武道（柔剣道）を免除されていた。ようやく運動ができるようになったので，私の父は，元気のいい秋田犬一頭を手に入れてきて，毎日この犬をつれて散歩するようにと私に命じた。当時のわが家は，名古屋市の郊外で耕地整理の終わったばかりのところにあり，散歩には理想的な環境だったが，散歩の伴侶のはずの犬のほうは，すぐにも駈け出すくせがあり，ひもを持った私も，つい引っぱられるように駈け足になるのが常だった。こうした条件で走るときには，おのずから膝が高くあがる。そして，長期療養で五臓六腑の刷新ができたおかげだったか，私はかなり長時間力走しても息切れがせず，走ることに自信ができたのだった。春秋の筆法をもってすれば，1923年の猩紅熱禍が私を陸上競技に結びつけた機縁だったと言えようか。

そんなわけで，1929年の春，中学4年修了で旧制の第八高等学校に入学した私は，即座に同校の陸上競技部に入部した。当時の八高は金沢の四高と毎年7月に対抗戦をしていたが，連敗続きの数年で，その年も四高には金居という十種競技の名選手がいて，八高には勝利の見込がないと言われていた。ところが，

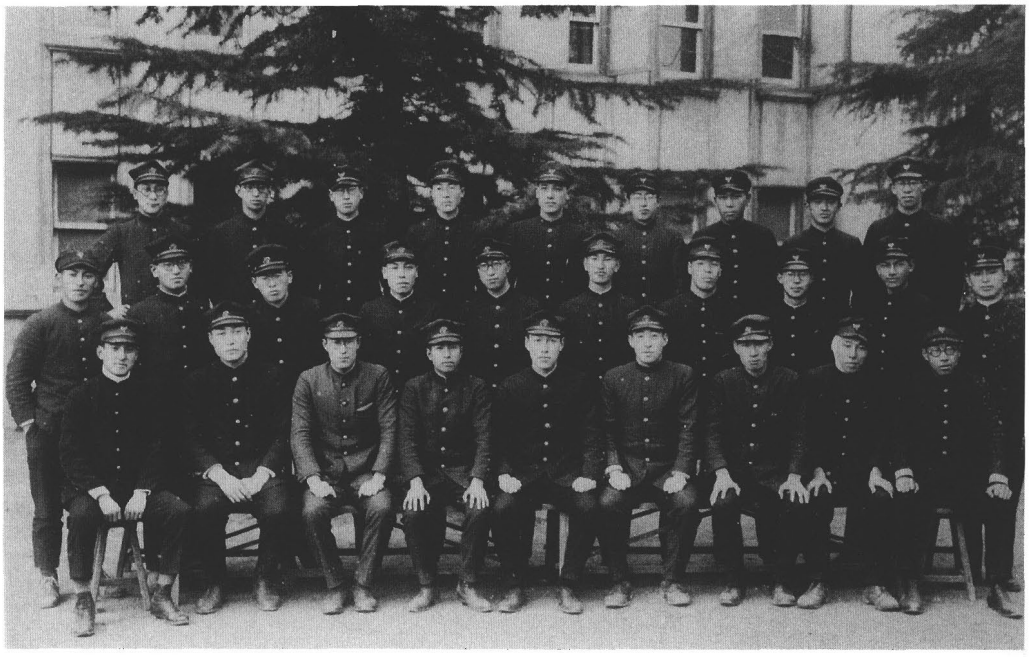
新入生の私が八百，千五百と五千に一等をとり，最後の種目千六継に負けても，八高が勝つというきわどい勝負に貢献することができた。四高には，その学生時代（1926年）に百メートルで10秒８の日本新記録を出した相沢嚴夫という先輩がいて，その後京都大学に進んだ彼が，この1929年の四高・八高戦の選評を『アサヒ・スポーツ』に書き，「都留はフォームも立派である」と褒めてくれたのだった。愛犬との駈足のおかげだったのだろう。

その年は，京都で催されたインター・ハイに私は出場し，五千メートルで辛うじて６位に入賞し，八高が無得点に終わるのを防いだのだったが，この時も，『アサヒ・スポーツ』誌上では，大会委員評として，「都留君は実に伸々とした走り方である，今後此種目を目指して進むべきであると思う」と励まされた。後年，一橋大学で跳躍の指導をしていただいた田島直人さんは，この年のインター・ハイでお会いしたのだった。

八高での私の陸上競技生活は一年生のときだけで，二年になってからは学生運動で忙しく，結局，その年に検挙されて，八高を除名されることとなり，1931年の秋，笈を負うてアメリカへの遊学の途につくこととなった。最初の２年間はウィスコンシン州のローレンス・カレジに席をおいたが，いずれかの運動部に属していれば，必修の体育は免除されるというので，そこでも陸上競技部の部員となり，私は，トラックでは二マイル，そのほかにクロスカントリーを専門種目とした。

1942年に交換船で帰国し，教育召集を受けて宮城県で二等卒訓練でしごかれた時，見かけよりも健脚だと班長に言われたのも，中長距離で長年きたえた脚のおかげだったのだろう。21世紀まで生きて米寿を祝うつもりの私だが，ここまで元気でおられるのも，若い時の陸上競技の賜物と自負している。

（元部長，元学長）



創部期のメンバー（大正末期）

中村幸治　水野重雄　花田崇一　榎本鈑太郎　江夏眞二　水上達三　山田省吾　大須賀謙次郎　赤沼悦郎

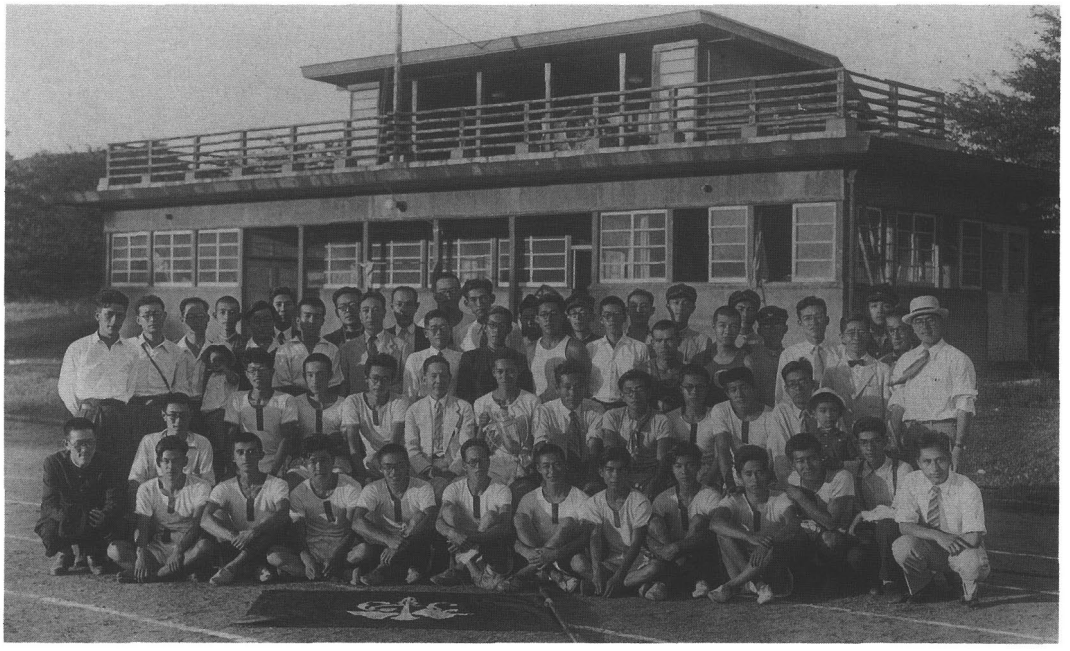
石川武　黄離　五十嵐数馬　不明　猪瀬辨一郎　石田磊　佐伯英三　鈴木広蔭　吉田鶴雄　久保田才次郎

岡一夫　根岸正一　矢野克己　寺尾一郎　伊藤太一郎　足立祐次　坂岡操　鷺島富造　不明

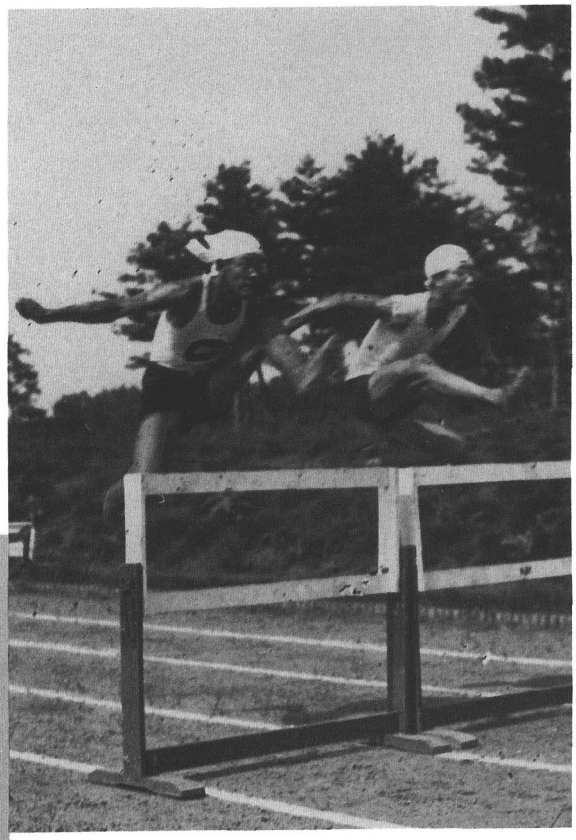
国立グランド風景（昭和初期）

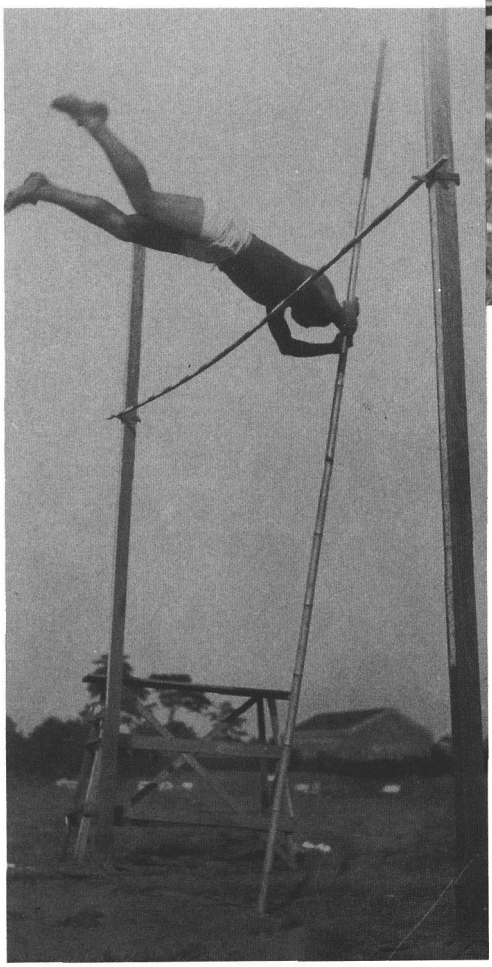
国立校舎（昭和初期）

国立グランドより図書館を望む（昭和初期）



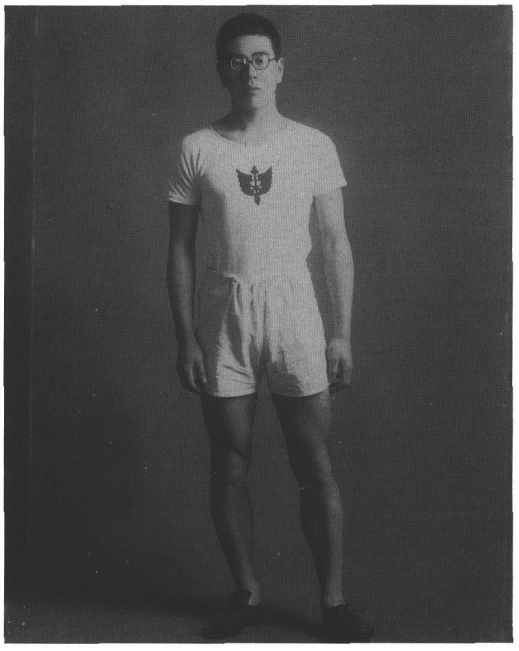
国立部室前にて（昭和初期）

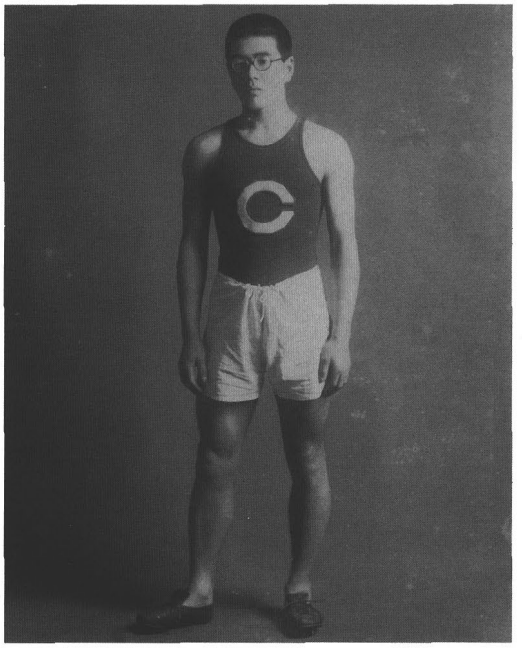




国立練習風景（昭和4年）

予科陸上競技部員（昭和4年）





昭和初期 予科ユニフォーム（尾本信平氏，本文168頁のコラム参照）

第2回 全国高商大会（昭和8年，於 神戸市立陸上競技場）

北大戦400m決勝（昭和9年，本文97頁参照）

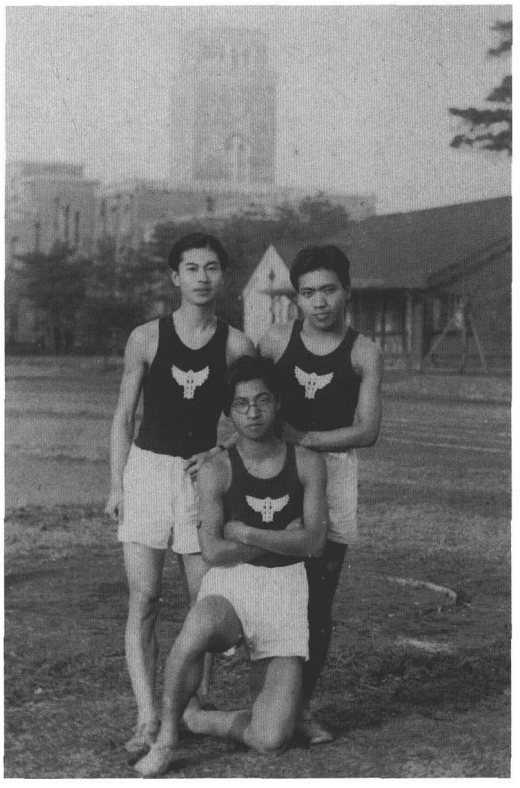
戦前の鉄人 木原正義氏の勇姿

走，跳，投の各種目にわたり戦前学内記録の上位を占めた木原氏（昭和15年卒）は正に鉄人にふさわしい傑出したアスリートであった。卒業後，社会人として更なる活躍を期待されながら間もなく早逝されたのは余りにも惜しい事であった。

木原氏の記録　　○枠内は戦前の学内順位

100m	①	11″1	三段跳	①	14m12	砲丸投	①	11m30
200m	①	22″7	走高跳	②	1m85	円盤投	②	33m10
110H	④	16″7	走巾跳	③	6m66	槍　投	③	50m12

商大専門部陸上競技部員（昭和12年 国立部室前）

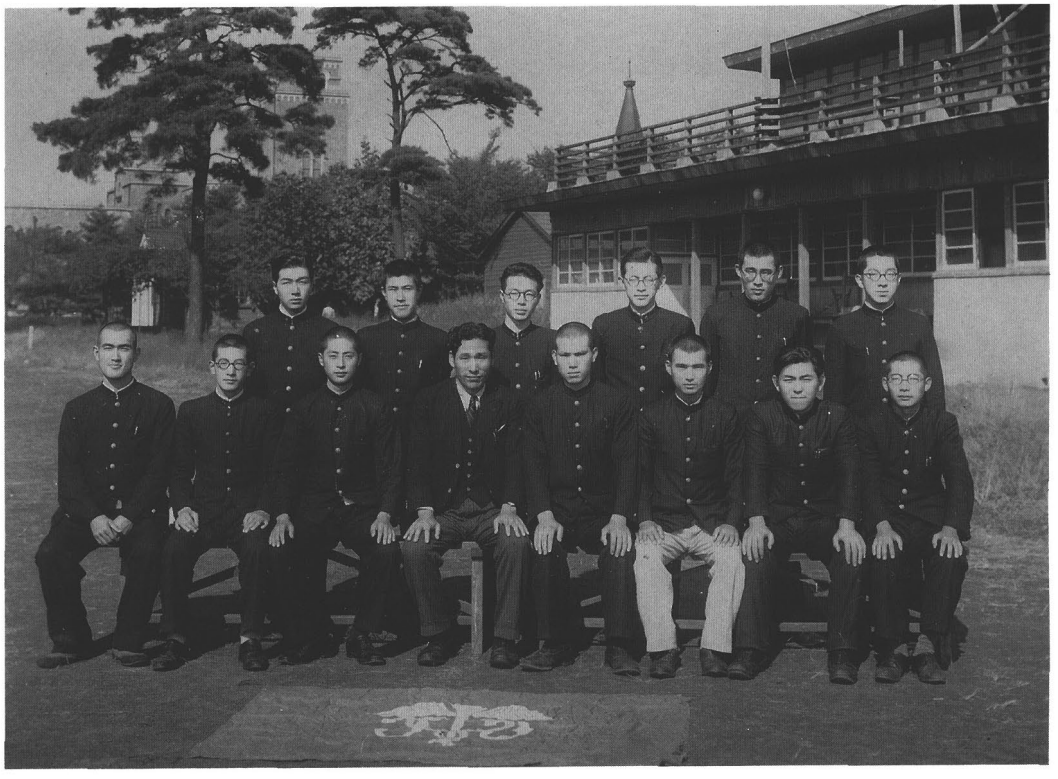


専門部ユニフォーム（昭和12年）

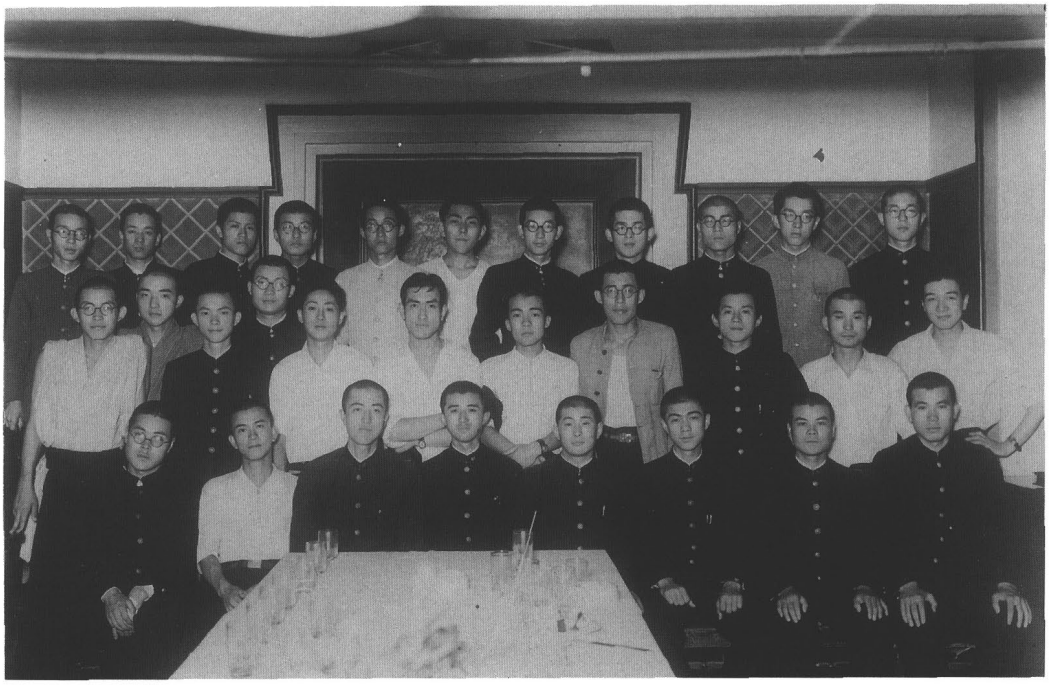
インカレ優勝の翌々日，中山部長を囲んで（昭和16年6月 部室前）

杉村壮一郎（18後）
岡田　康（18）
神谷　憲（17）
三隅義信（17）
黒住忠行（17）
香川俊雄（18）
斎藤定雄（16後）
中山　実（18）
裏辻三郎（18）

前田　南（16後）
松島英夫（16後）
中山伊知郎部長
新坂建也主将（16後）
数原年郎（17）
永田　博（18）



学徒出陣壮行記念（昭和18年10月）



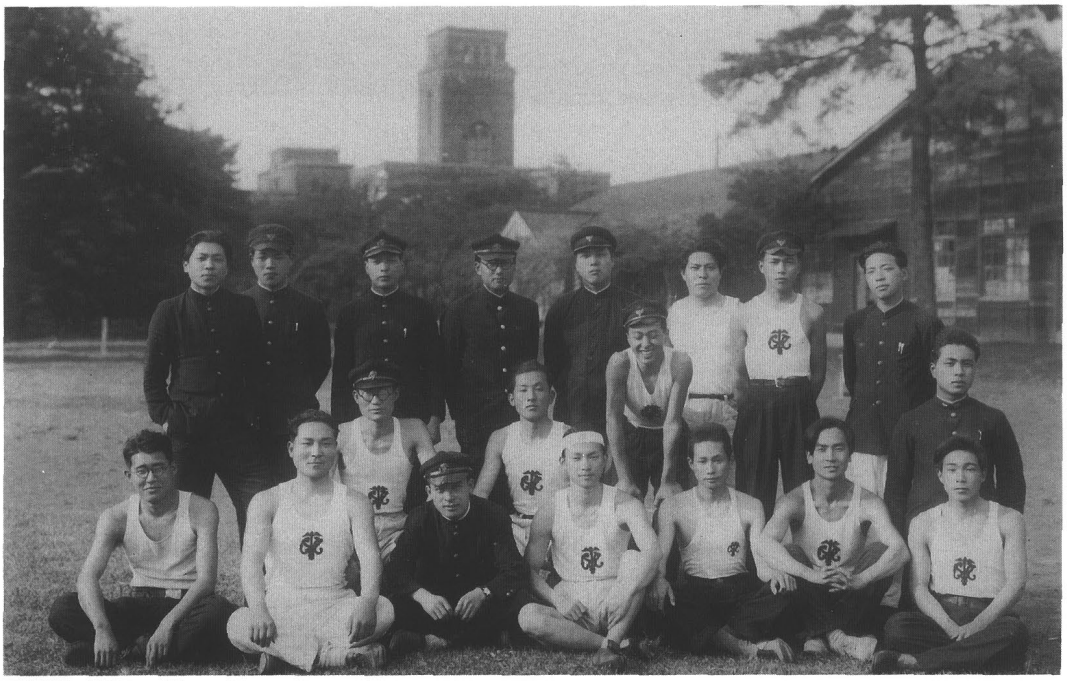
卒業記念（昭和18年　於 如水会館）

中島（予1）
山澤（予3）
今田（予1）
稲垣（予1）
加藤（本2）
三谷（本2）
松本（予3）
吉村（予2）
加藤（予1）
小林（予2）
河鰭（予3）

鈴木（本1）
関谷（本2）
末永（本1）
家徳（予3）
向田（本2）
西岡（本1）
大木（本2）
髙橋（予1）
岩田（予2）
斉藤（予1）
世良（予3）

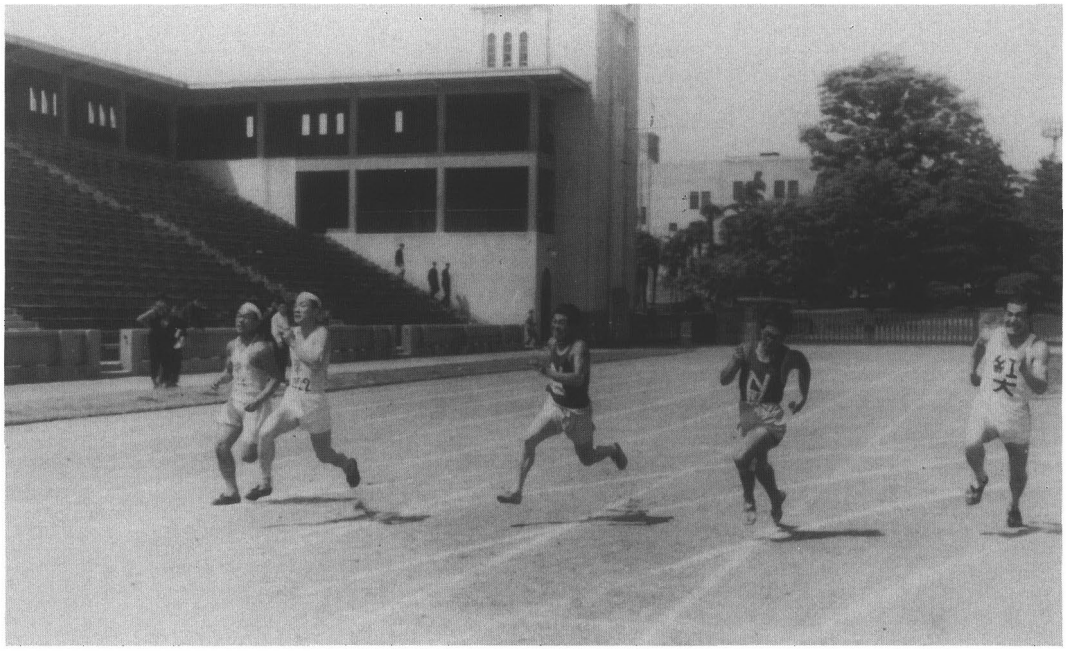
裏辻（本3）
井出（専3）
中山（専3）
香川（専3）
杉村（専3）
岡田（本1）
永野（専3）
長谷川（専3）

卒業生を送る（昭和21年9月）



国立グランドにて（昭和22年5月）

関東IC入場式　昭和22年5月　於 ナイルキニックスタディアム（神宮）

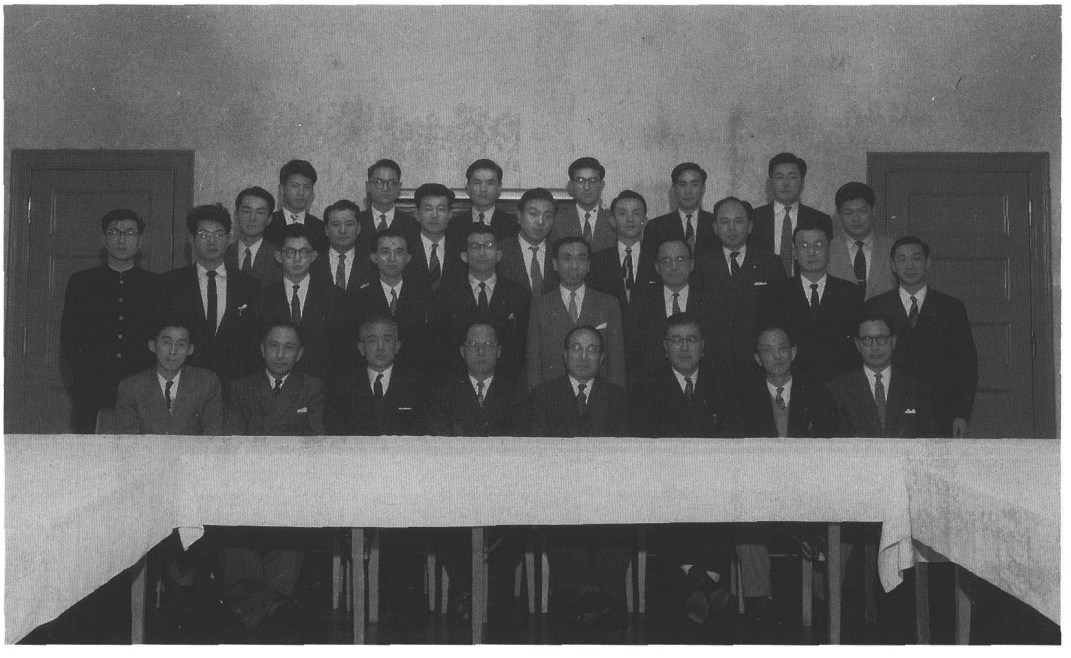


関東インカレ200m決勝（昭和22年）
左より　青木（3位）　岩田（1位）

槍の天明氏の勇姿（昭和24年）

三商大戦（国立グランド）（昭和24年7月31日）

神戸との対抗戦（昭和25年7月30日　於 明石）

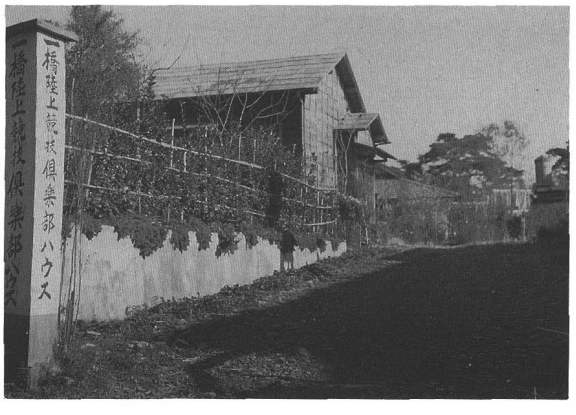


陸上倶楽部総会（昭和33年3月　於 如水会館）

東大戦 100m ゴール　左より ① 竹田（一）　② 浦野（東）
1人おいて ③ 藤井（一）（昭和31年　於 駒場）

三大学戦優勝（昭和33年7月　於 部室前）

倶楽部ハウス玄関前にて（昭和34年3月）



倶楽部ハウス入口

倶楽部ハウス管理人
近藤節さんを囲んで

水上達三会長邸に競技部会員が招かれて
懇親会を催された際の会長のお姿

水上パーティでご挨拶される水上会長（昭和52年　於 水上邸）

目　　次

題字は，都留重人名誉会員揮毫

巻頭のことば　会　長　尾本信平

発刊に際して　名誉会員　都留重人

部　　歌

1. 一橋大学陸上競技部部歌

部歌について　富士　豊（昭和6年卒，故人）……　3

一橋大学陸上競技部の発祥と部歌の誕生　吉見泰二（昭和11年卒，故人）……　4

2. 東京商科大学予科陸上競技部部歌

東京商科大学予科陸上競技部部歌について

尾本信平（昭和8年卒）……　7

節目の記録

1. 創部のいきさつ(インタビュー)　岡　一夫（大正14年専卒，故人）…　11
2. 追憶・競技部誕生前後　水上達三（昭和3年卒，故人）……　15
3. 会長就任の挨拶　田部文一郎（昭和5年卒）……　17
4. 故水上達三会長を偲びて　尾本信平（昭和8年卒）……　20
5. 全国高商大会開催の回顧　尾本信平（昭和8年卒）……　24
6. 輝く制覇 － 第23回 関東IC戦記　中牟田研一（昭和16年12月卒）……　29
（昭和16年6月9日の朝日新聞の記事収録）　數原年郎（昭和17年卒，故人）
7. 終戦前後の陸上競技部－どん底から関東IC2部優勝へ

岩田正雄（昭和23年卒）……　43

8. 第一回三大学陸上競技対抗定期戦記　辰野康夫（昭和27年卒）……　49
9. 一橋陸上競技倶楽部ハウス建設の経緯　渋谷鋭市（昭和28年卒）……　55
10. 四半世紀前のクラブ資金繰　内藤藤三（昭和38年卒）……　59

各年次会員随想

1. 競技部生立の記　山根春衛（大正10年卒，故人）……　63
2. 一橋大学陸上競技部の誕生について　伊藤太一郎（大正14年卒，故人）……　65
3. 国立の思い出　黒川　潔（昭和4年卒）……　66

4. 戦地通信　滑川彦次郎（昭和4年門卒，故人）… 68
根橋武男（昭和5年門卒，故人）… 69
5. 都会の雑踏　坂本兆廣（昭和5年卒）…… 71
6. 陸上競技部に関わる60年余年誌　日比野慶二（昭和5年門卒）…… 73
7. 競技部時代の思い出　斎藤長太郎（昭和7年門卒）…… 75
8. 我が陸上競技生活を顧みて　寺田恒次（昭和8年卒）…… 76
9. 競技部の思ひ出　石　平一郎（昭和9年卒，故人）…… 80
10. 無　　題　間瀬　正（昭和9年卒，故人）…… 82
11. 懐かしの一橋陸上競技部　新谷健市（昭和10年卒）…… 83
12. 水上先輩の一言　松原美義（昭和11年卒）…… 84
13. 無　　題　久留　武（昭和11年卒）…… 85
14. 随　　想　生田目輝夫（昭和12年卒，故人）…… 87
15. 陸上競技部に関する思い出　神谷三雄（昭和13年卒）…… 89
16. 思い出二題　白井喜正（昭和13年卒）…… 92
17. 山中さんの思い出　横溝孝之（昭和13年卒）…… 97
18. 最近見た少年時代の夢　外村善一（昭和14年卒）…… 99
19. 卒業に臨んで　木原正義（昭和15年卒，故人）…… 101
20. 駆け足行進　木下和蔵（昭和16年卒）…… 104
21. 思い出すままに　野村好夫（昭和16年卒）…… 105
22. 級友五君を悼む（含む「悲劇のキャプテン」）
神谷　憲（昭和17年卒）…… 106
23. 伝統と発展 －私達の誇り－　黒住忠行（昭和17年卒，故人）…… 112
24. 青春の思い出　杉村壮一郎（昭和18年卒）…… 114
25. 思いだすまゝに　香川俊雄（昭和18年卒）…… 117
26. 陸上競技の思い出　中山　実（昭和18年卒）…… 119
27. 昭和20年前後　河鰭幸雄（昭和22年卒）…… 121
28. 落ちこぼれ部員の思いで　松本勝之（昭和22年卒）…… 123
29. 無　　題　三浦由雄（昭和22年卒）…… 125
30. 一橋競技部・同クラブへ参加のいきさつ
星野惣次（昭和24年卒）…… 127

31. 昭和18年 — 24年部の経過　高橋　保（昭和25年卒）…… 131
32. 無　題　天明良介（昭和26年卒）…… 137
33. 昭和26年回顧　秋山之保（昭和27年卒）…… 139
34. 年　輪　窪田　稔（昭和27年卒）…… 142
35. 私と陸上競技（戦中，戦後の思い出）　千葉金助（昭和28年卒）…… 144
36. 競技部は精神教育の場　渋谷鋭市（昭和28年卒）…… 147
37. 史上最弱軍団の記　阿部湘一郎（昭和29年卒）…… 149
38. 思い出される今は亡き二人の先輩　瀧　泰之（昭和30年卒）…… 151
39. クラブハウス初代住人の記　福島清四郎（昭和31年卒）…… 153
40. 競技部の思い出　山口　明（昭和31年卒）…… 155
41. 記録の壁は固くはなかった　竹田英俊（昭和32年卒）…… 156
42. 無　題　春日井　弘（昭和32年卒）…… 158
43. アスレティック奨励金　山田準一郎（昭和32年卒）…… 160
44. かけもちとネトネトインク　奥村誠司（昭和33年卒）…… 162
45. 第二の陸上競技人生　松永宣夫（昭和34年卒）…… 164
46. 40年前の思い出　唐川光彦（昭和34年卒）…… 166

一橋大学陸上競技部年譜 …… 173

一橋陸上競技倶楽部と日本陸上競技連盟とのかかわり …… 199

Athletik Freund Back Number 総目次 …… 205

一橋大学陸上競技部各種大会記録集

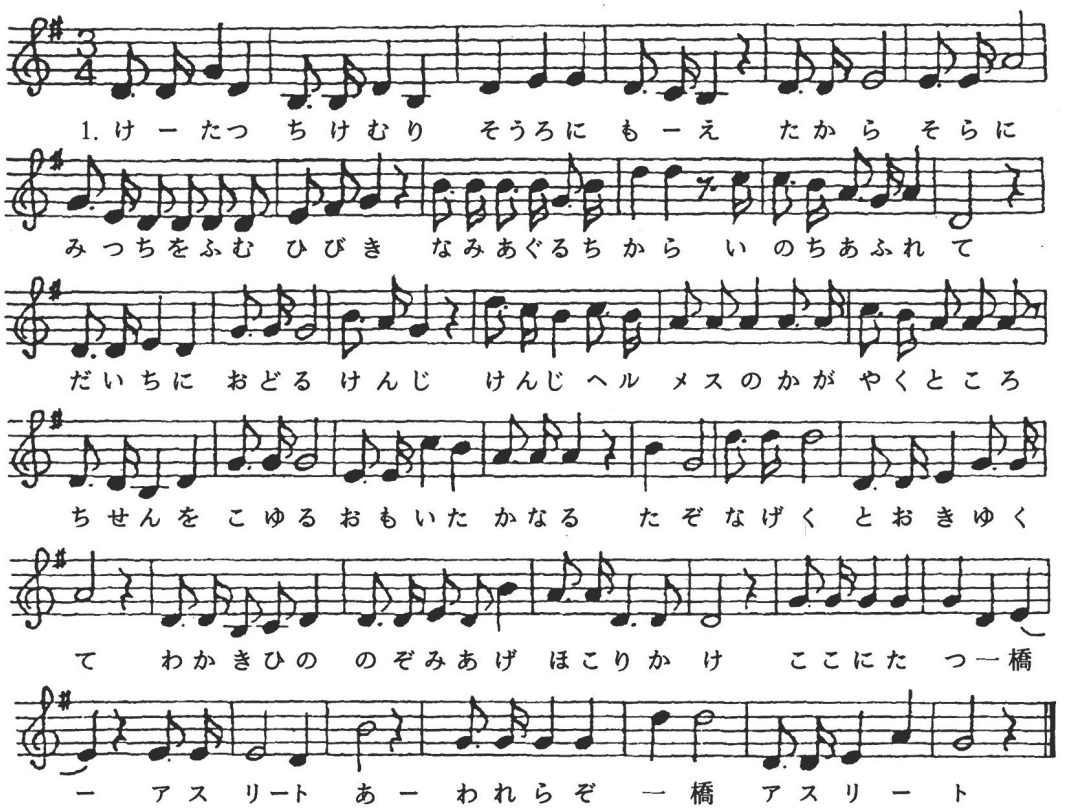
1. 本学学内記録の変遷（戦前，昭和30年，35年）…… 233
2. 学内　3傑（昭和35年）…… 235
3. 第一回全国高商大会記録一覧表（昭和7年7月16日，17日）…… 237
4. 各種大会記録（三大学戦，東大戦，関東ICを含む）…… 242
5. 関東IC入賞順位・記録・得点（本学関係）…… 319

編　集　後　記　阿部湘一郎（昭和29年卒）…… 333

部　　歌

一橋大学陸上競技部部歌

富士　豊 作詞
諸井三郎 作曲



作詞　富士　豊（昭六卒）
作曲　諸井三郎

一、
蹴たつ地煙　走路に燃え
高ら空に充つ　地を踏む響き
なみあぐる力　生命溢れて
大地に躍る　健児々々
ヘルメスの輝くところ
地線を超ゆる　希念たかなる
誰ぞ嘆く　遠き行く手
若き日の希望あげ　矜恃かけ
ここに立つ一橋アスリート
ああ　我等ぞ一橋アスリート

二、
苦練は古く　悲歌は遠し
高ら今や宣る　凱歌とどろ
世紀に遥けく　ひかり輝き
力ぞ満てる　我等々々
アキレスの栄光えを荷負うと
永遠の望みに　憧憬こむる
誰ぞ嘆く　高き抱負
若き日の希望あげ　矜恃かけ
ここに立つ一橋アスリート
ああ　我等ぞ一橋アスリート

部歌について

富　士　　豊
（昭和6年卒，故人）

先日，水上達三さんのお宅で陸上競技部の懇親会が催され，終わりにお庭の芝生の上で先輩，現役一同数十名陣をつくって高らかに部歌を斉唱した。その日，空は晴れて秋晴れてのすがすがしい風に乗って歌声は流れた。それは私が50年前に作った歌だった。私は胸がひきしまる程感激に溢れた。私の青春の置土産が，50年の年月を生きていた。今回「アスレテーク」編集部から部歌制定のことについて書けとのお話があったが，50年前のことで正確な記録がないので思い出したままのことを綴っておく。

一橋大学応援部歌集編纂会発行（如水会発売）の一橋歌集77頁に所載されている陸上競技部部歌曲（諸井三郎作曲）には昭和３年作と記されている。

昭和４年に「長煙遠く」の外に新しい一橋の歌を作ろうとの声がおこり一橋会が一橋新聞紙上で新しい一橋の歌を募集した。私もそれに応募したが２席となり１年先輩の酒井敬三郎さんが当選された。「空高く光みなぎり」（山田耕作作曲）の歌である。私が一橋陸上競技部の歌を作ったのはそのあとのことである。私のクラス会（昭六会）では「われらの半世紀」を昨年12月に発行したが，その中の一橋年表（これは古い記録を調べて作った正確なものである）によると「一橋の歌」は昭和４年12月に募集され昭和５年９月に選定されたことになっている。すると私が陸上競技部々歌を作ったのは昭和５年以降ということになる。「一橋の歌」も一橋大学応援部編纂の一橋歌集では昭和２年作となっているからいずれも間違いということになる。

部歌の作曲は当時新進の作曲家であられた諸井三郎先生であるが，作曲の依頼は当時キャプテンをしていた村木君が当たったものと思います。村木君は美声家であり音楽の素養もなかなかのものであった。（昭和43年没）

私の拙い歌が今もなお学生諸君に歌いつづけられているのは良い曲のせいであり，私は大変有難いと思っている次第です。

（ATHLETIK FREUND 1977より収録）

一橋大学陸上競技部の発祥と部歌の誕生

吉　見　泰　二
（昭和11年卒，故人）

去る12月8日（木）虎の門東京クラブに於いて開催された，山根大先輩（大正10年卒）の傘寿祝賀会の席上での話。当日は，80才を超えられ今も尚御元気の山根大先輩を主賓に，都留名誉部長，細谷部長を来賓として，次のOB諸氏が集った。

吉田鶴雄氏（昭2）	水上達三氏（昭3）
相馬勝夫氏（昭5）	冨士　豊氏（昭6）
相川　勇氏（昭7）	富岡八十雄氏（昭7）
尾本信平氏（昭8）	米沢義史氏（昭8）
間瀬　正氏（昭9）	久保田才次郎氏（昭10）
岡本市郎氏（昭11）	松原美義氏（昭11）
吉見泰二氏（昭11）	横溝孝之氏（昭13）
成沢毅一氏（昭14）	高橋　保氏（昭25）
山本省吾氏（昭26）	秋山之保氏（昭27）
佐野嘉男氏（昭35）	矢島一孝氏（昭38）

開会の挨拶に立った高橋幹事長は，「OBクラブの会合で傘寿の祝賀会はこれが最初であり，人生160才に達したのを全寿といい，山根大先輩も未だ漸く半ばの半寿に達せられたので，これからも益々健康に留意されて全寿を迎えて頂きたい云々。」と挨拶。

次いで，水上達三会長から祝辞と記念目録の贈呈，並びに，尾本副会長が音頭をとって，傘寿の乾杯があった。

その間，答辞を述べられた山根主賓から，不図も吾が一橋大学陸上競技部の発祥の経緯が述べられたのであるが，列席の大先輩諸氏も全くの初耳であり，当クラブの歴史上最も重要な事柄であるので，山根先輩の御許しを得て，特に記載する次第である。

山根大先輩が，郷里の栃木中学を卒業して，東京高等商業学校予科に入学されたのが，大正6年4月の事。当時は，予科1年本科4年制であったが，中学生時代の陸上競技をやりたいと思っても仲間はなく，不敢取柔道部に籍を置いたが，スパイクへの郷愁断ち

難く，一人グランドを走っていた。その内，一緒に走る仲間が段々と増え，一つの部としての人数もどうにか揃ったので，大正９年４月，校長に就任した許りの佐野善作先生の処に，村上進君と佐久間君と三人で陸上競技部設立の陳情を行った。これには，当時体育の教官であった陸軍戸山学校出身の笛重五郎・藤沢宅二両先生の御助力もあったのである。所が佐野学長は，「東京高商には公認の部として，端艇部・柔道部・剣道部・弁論部の４つの部があるが，新しく設立する為には，先輩の諒解と予備措置が必要であるから，暫く部を認める事は出来ぬ。」との事で却下された。然し乍ら，学生側は，是非共実現したい一心で学校側とも折衝，大正９年秋，学校側を動かし，最初の校内陸上競技大会を開催した次第である。山根先輩は翌大正10年３月卒業になり，又，大正12年秋には，関東大震災発生の為一時休校となり，陸上競技部活動も中断してしまった。

其後幾許もなくして，水上達三先輩がその英姿をグランドに現し，名実共に陸上競技部の誕生となるのである。

尚，去る11月５日（土）水上会長邸にて，冨士先輩（昭６），相川先輩（昭７）両氏から現在の陸上競技部々歌誕生の話があったので，佳い機会であるので併記しておく。

既に故人となられた村木武夫先輩（昭８）は，陸上競技の他，あらゆる面で多芸多才な方であった。彼が現役時代「陸上競技部に部歌を作ったらどうか」といい出し，当時文学的才能が豊かであった冨士豊氏が作詞。作曲は，後日日本一流の作曲家として高名になった諸井三郎氏の未だ下積時代に，村木氏が伝を求めて，村木・相川両氏で諸井氏に依頼完成したのが今日の部歌である。

（ATHLETIK FREUND 1977より収録）

東京商科大学予科
陸上競技部・部歌

（昭和５年）

尾本信平・作詞
岡本敏明・作曲

Allegretto

ちせんは　とうく　みどりして
こんぺき　のそら　いやたかし
わかきいのちの　かんげきに
だいちを　かくるわがすがた
ーたかな　るむねを
ーうとうかな　ー

東京商科大学予科陸上競技部部歌

原作曲　岡本敏明
作詞　尾本信平
採譜　小山章三
（昭和五八年三月七日）

（一）
地線は遠く緑して　紺碧の空いや高し
若き生命（いのち）の感激に　大地を駆くる吾が姿
高鳴る胸を歌ふかな

（二）
勝利の夢もまどろかに　武原にこもり幾年ぞ
意気と力に結びては　無言に震ふ魂と魂
吾等が団（つどい）いたたえずや

（三）
秋昷朧の色映えて　走路に立てば笛鳴りぬ
今戦いの時到り　玉砕にもゆる意気高し
吾等が正気誇らずや

（四）
友よなげきは遠くして　懐（おもい）は流れる一橋
今武蔵野に木魂（こだま）して　若き男子（おのこ）の歌声（こえ）高し
吾等が凱歌君聞くや

東京商科大学予科陸上競技部部歌について

尾　本　信　平
（昭和8年卒）

それはもう，50年以上の前のことです。私が東京商大（現一橋大学）予科から本科（学部）へ入った頃，柄にもなく予科陸上競技部々歌を作詞し，これを予科の部員に贈呈したのです。当時商大には，ボート部の歌や水泳・ラクビー部の歌はありましたが，陸上競技部にはありませんでした。殊に他の高校（旧制）との試合に部歌が無いということは淋しいし，意気も上がらないわけです。また，学寮に居つてもボート部の歌ばかり聞かされるのも面白くありません。私は当時陸上部で，短距離・走高跳・走幅跳・ハードル等に熱中し，部の統率にも骨折った経験があったので，学部に進んだ時に部歌を作って，予科の部員に送った次第です。

作曲は誰の紹介だったか覚えておりませんが，当時の若手作曲家・岡本敏明さんに頼み，出来上った時には部室までお出で願い，私も出かけて行って歌い方を教えていただいたことを覚えています。岡本さんは若くハンサムで，拙い私の素人作詞に曲をつけて下さいました。お金が無いので，お礼には毛糸のシャツをお贈りしたように思います。私の作詞は全く拙いものですが，武蔵野の雑木林や大根畑を走り廻っていた私共の，勝敗に涙し，記録に挑戦していった若き生命の躍動は，今になっても懐しい一生のひとこまです。これに曲をつけて下さった岡本先生に厚く感謝いたします。

追記：本稿は菅野善二氏（専門部出身，元三井鉱山勤務）が，福島中学同級生で国立音楽大学名誉教授の作曲家・岡本敏明氏（昭和52年死亡）の遺曲集を心がけられ，その初期の作品として当部歌の楽譜を求められましたが遂に見当らず，止むなく小生が歌い，これを岡本教授の高弟の小山章三氏（国立音楽大学教授）に採譜をお願いしたものです。岡本氏の遺曲集はしばらく見送りとなりましたが，折角の採譜ゆえ，菅野氏に貰い受け，陸上部の記録として残したいと思った次第です。

作曲者・岡本敏明氏　略歴

福島師範附属小学校，福島中学を経て，国立音楽大学第１回卒業。

岡本氏は一生涯，音楽の生活化と取組み，誰にでも楽しく歌える健康的な歌を数多く作曲した。特に，『どじょっこ　ふなっこ』等は海外にも広く知られ，又我が国の合唱運動の啓蒙家でもあった。

昭和52年10月21日　癌のため逝去。

以　上

節　目　の　記　録

創部のいきさつ（インタビュー）

岡　　一　夫
（大正14年専卒，故人）

日　時　：　1994年6月18日
場　所　：　静岡県雄踏町　岡氏宅
面談者　：　松　永　宣　夫（昭和34年卒）
　　西　　康　宏（昭和57年卒）

面　談　内　容

問　：　陸上競技部の誕生の頃のお話をお聞かせ下さい。

答　：　大正11年頃と思うが，予科の伊坂市助君等が夕走団と称して，神田の一橋の辺りを走る同好会的なものがあった。専門部の私は参加しなかった。その後，関東大震災（大正12年）により，予科は幡ケ谷の東京高校に移り（その後，石神井に校舎が新築されて移転）専門部も渋谷の東京農大に移り，その後一橋に戻った。大正13年頃には，本科，予科，専門部（教員養成所を含む）各々で同好の士の集まりが出来ていたが，夕走団が母体となった訳ではない。各集まりはそれぞれ別個の集まりであったが，同年の一橋会（予科，専門部，本科全学生で組織された自治会，下部組織に予科会，専門部会，本科会がある）で陸上競技部が認められ，対外的な試合に三科の競技部が一体となって，参加した。

問　：　専門部の陸上競技部はどのようなものでしたか。

答　：　大正13年（？）の専門部会総会で，陸上競技部の創立は，サッカー部（その頃はア式蹴球部と呼ばれた），ラグビー部（ラ式蹴球部）とともに否決されたため，当時の専門部の陸上競技部は同好の士の集まりの域を出なかった。尚，正式に部となったのは大正14年であった。私は，当時，専門部会陸上競技部の理事（専門部会執行部の一員）で部のキャプテンと両方を兼ねていた。私の後任理事には教員養成所の吉次利二君（大学に進み昭和４年卒）と私は決めていたが専門部会執行部の強い要望（某君を専務理事とするため）で仕方なく某君を認めさせられた。吉次君にはキャプテンとなって貰い実質的に専門部競技部のトップになって貰っ

た。後年，専門部からは根橋武男君（昭和５年卒）という体格がすぐれた豪傑万能選手が出て本学の代表選手としてインターカレッジで400ｍ，三段跳び，10種，５種競技その他で入賞，東京商大のため大いに気を吐いてくれた。

問：当時は陸軍戸山学校の下士官の方が陸上競技を指導されたと聞いていますが。

答：当時の本学（予科，専門部）の体操授業の教官に，陸軍戸山学校の現役下士官が10名ほど嘱託されていた。そのリーダー格の笛重五郎先生が陸上競技に興味を持たれ，競技用具を備えてくだされたと記憶しているが，特に陸上競技を指導されたわけではない。また当時日本には殆ど知られていないラグビーのタックルマシーンを（石神井に）設置されたり，本学の体育に貢献された。

問：当時の学校にはどんな部がありましたか。

答：運動部としては庭球，馬術，柔道，剣道，ボート，弓道は既にあった。陸上競技やラグビー，バスケット，ホッケーなどはその後同じ頃できたと思う。

問：第１回神戸高商戦について教えていただけますか。

答：第１回神戸高商戦は早稲田高等学院の戸塚競技場で行われた。
当時，神戸高商は関西では同志社や京大などと覇を争う有力校で，短距離で天野，和田の他強豪がそろっていた。当時，新聞の運動欄にも「商大は相手になるまい」と書かれた程で，こちらも勝てるとは思わず，あきらめていたがイザ開始すると大接戦となり（相手はこちらをナメテ調子を下ろしていたのではないか？），最後の200ｍ×４リレーで勝敗が決まることとなった。本学はキャプテン足立祐次君（大14卒）が第１走者でスタートよくリードしたが，第３走者あたりで並ばれ，ラストで矢野君？（大14卒）が神戸の天野君にゴール手前で抜かれ僅少差で敗れた。合計で僅か２点差で神戸高商の勝利となった。
２，３年後の対抗戦（神宮競技場）では，最後のリレーでアンカー，神戸が僅かリードし，これに触れんばかりにこちらの川本信正君（キャプテン，昭３卒，読売新聞の運動部記者となり，その後，運動評論家として現在も有名）が追走していたが，第４コーナーの手前で二人とも同時にパタリと前に，特に川本君は相手の背中におおいかぶさらんばかりに倒れ，瞬時二人とも動かなかったので（観る方からは相当長い時間，動かないように感じた）怪我をしたのかと心配したが，

ともにすぐ立ち上がって走り出したので皆，ホッとした。神戸の勝。

問：大会の模様を教えて下さい。

答：種目は，100 m，400 m，1500 m，5000 m，200 mハードル，走り幅跳び，走り高跳び，円盤投げ，砲丸投げ，槍投げ，200 m × 4 リレー等であったと思う。本学のメンバーはキャプテン足立祐次（大14卒，短距離，走り幅跳び，リレー）下村太一郎（大14卒，短距離，ハードル，リレー。卒業後，伊藤と改称），坂岡操（大14卒，円盤投げ），佐伯英二（大15卒，槍投げ），清田泰一（大15卒，走り幅跳び），水上達三（昭３卒，中距離），根岸正一（大14卒，遠距離），水野（遠距離），吉次利二（昭４卒，円盤投げ），猪瀬弁一郎（大15卒，マネージャー）他。審判は早稲田大学競走部にお願いしたと思う。当時インターカレッジは極東オリンピック（現在のアジアオリンピックの前身にあたる）に関することで体育協会と意見があわず脱退していた。

問：岡さんは第１回神戸高商戦では何に出場されましたか。

答：私は200 mハードルに下村君とともに出ました。結果は下村君が１位，神戸が２，３位で私は４位でした。当時は１位から３位までが得点（３～１点），リレー，１位３点でした。神戸では第一ハードルを故意にパタリと蹴倒して相手を驚かし調子を乱す戦法（？）があると噂されていたが，私はマンマとこれにはまったわけです。

問：神戸高商戦の前には全一橋陸上競技大会を開催したと聞いていますが。

答：大正13年の春に駒場の帝大（現，東京大学）のトラックフィールドで行われました。本科，予科，専門部の三科対抗戦で本科が優勝，予科が２位，専門部はビリでした。専門部は部員が少なく掛け持ちが多くやむをえません。私は100，200ハードル，円盤投げ，リレーなどに出ました。

問：当時の陸上競技の思い出はどんなものですか。

答：大正14年の夏，石神井のグラウンドで合宿した思い出がある。
同室は下村君と猪瀬君だった。私は府立四中の出だが，甲府中の２年からの転校だった。猪瀬君は山梨師範付属小学校で私の２，３年先輩で甲府中学校でも商大

でも先輩です。因みに水上君も私と甲府中学で組は違うが同級でした。甲府中学では全く面識もなかったが，商大の競技部で初めて知り合ったわけです。彼は当時，練習では800ｍで度々２分を切っていました。当時は800ｍはインカレの一流選手でも２分を切る者はあまりいませんでした。同君はインカレの大会で２位になったことがありますが，２分は切れませんでした。インカレで入賞したのは前述の根橋君とこの水上君くらいです。

（岡氏追伸）

★　ついでながらみんなのアダナ名（？）を披露しましょうか。
足立君（すけさん），下村君（べえさん），坂岡君（やぎさん），佐伯君（かばさん），猪瀬君（べんチャン），根岸君（ねぎ），私にはなかった（？）と思う。アダ名らしく呼ばれた記憶が無い。

★　一橋の狭い運動場で，陸軍下士官教官の体操授業は，夏でも冬でも第１時間目（午前８時始業）なので出席するのは大変辛かったが，出席が悪いと落第点をつけられるというので辛いのを我慢して体操だけは皆出席でした。

以　上

追憶・競技部誕生前後

水　上　達　三
（昭和3年卒，故人）

最近宮城のお濠の囲りをランニング姿で走っている人が非常に多くなった。私は殆ど毎日，桜田門から宮城前を抜けて大手町迄車で通っているので，昼頃は特に多く，時には桜田門辺から北の丸方面へつながっている光景を見る事すらある。若い人が多いが，老若男女，外国人もいる

話は66年も前，大正11年（1922年）に溯るが，放課後4時頃から毎日の様にこのお濠の囲りを走る学生の一団があった。これが当時の東京商科大学予科生を中心とする学生であり，「夕走団」と言っていた。後に東京商大陸上競技部の中核となったグループである。

同じ時期に当時の東京帝国大学農学部の駒場運動場で商大の運動会が行われた。このトラックは300ｍ足らずであったが，当時は本郷の帝大，目白の学習院，早稲田の高等学院などと共に，一流の競技場として公式の競技場の様に使われていた模様である。この運動会には「夕走団」の走者が参加して，何れも好成績を挙げた。私も中距離競争に出場して記録が良かったので，之が縁となって，商大全体の陸上競技部を作ろうという有志のグループに加わることになった。

「夕走団」を作ったのは，私より一年先輩の伊坂市助さんであり，「夕走団」を中心にして競技部の創立を御熱心に推進された。ただ一橋の体操場は小石もあってスパイクは無理，短距離のスタートの練習程度がやっとというところだったが，長距離ランナーには，お濠の囲りは人通りは少いし頗る快適であった。併し私は中距離なので，「夕走団」のほかに，早稲田大学の友人の紹介で時には高等学院トラックでも練習することとした。そのために縄田尚門氏初め，有名選手と識る機会を得て幸運であった。

さて，大正12年9月1日の関東大震災は，東京・横浜を中心に焦土と化し，一橋の学園も煉瓦や木造は崩壊し焼失したため，予科は翌年4月より石神井の仮校舎へ移ることになった。競技部として正規の競技場の建設を学校側に強請した結果，多少傾斜した地形ではあったが，300ｍ足らずのトラックとその中にフィールドも整備，待望の学内での練習が出来る様になった。学校側も体操科の先生方が陸上競技に極めて御熱心で，

設備・器具などを整備して呉れたので，新参の部としては予算は少なかったが，部の存在も認められる様になった。その頃メキメキと強くなって来たバスケットボールや水泳も，私の競技部委員長の時に独立したので，いわゆる商大陸上競技部らしくなったと思う。

当時の商大陸上部の主要部員を思い出すままに挙げれば，伊藤（旧姓下村），佐伯，寺尾，猪瀬，石田，伊坂，吉田，清田，吉次，赤沼，岡，久保田，榎本，江夏，川本，水野，小林元，小林主，田部，村木，磯野，相馬，黄，峯岸，黒川，垣添，等々がある。

商大の本科，専門部は国立（当時は国分寺），予科は小平に決まった大正15年頃，国立に立派な公式にも使える明治神宮と同程度のトラックを欲しいとは，競技部関係者の一致した強い要望であったが，それが実現することになった。現場の設計等について学校側から部に相談があったので，明治神宮のトラックをモデルにすることで進めることとし，村木君等と協力して，暑中休暇の半分を費して，現場監督的のことをした。今もあるが一本の松を残すか否かの両論等，現地は現地で色々の問題があった。結局この松は残したのであるが，これは駒場のトラックにも同様に大木があったので，これに倣った次第である。部室もできて，私は先ず思い残すことなく，昭和3年春，社会へ巣立つことが出来たと思っている。

（ATHLETIK FREUND 1987より収録）

会長就任の挨拶

田　部　文一郎
（昭和5年卒）

此の度び栄えある母校一橋大学陸上競技クラブ会長に就任致しましたことは私にとって無上の光栄であり欣びであります。

初代会長の水上達三氏は本当の大会長であり夫れ丈けに立派な実績を持った方でありました。大正13年（関東大震災の翌年）私が予科に入学した時は水上氏は予科3年で石神井のトラックで颯爽と練習に励んで居られました。当時の一橋陸上競技部は未だほんの早々時代で同好者の集まり程度でした。毎年明治神宮で行われるインターカレッジに堂々と出場するのは水上氏位で然かも同氏は必ず3位には入賞されました。

当時800ｍ，1500ｍでは1位が早稲田の縄田氏，2位が慶応の岡田氏，3位が一橋の水上氏と殆んど決って居りました。対抗戦も余り強くない時を撰んでやっていました。神戸高商との定期戦では勝ったことがなく他は一高，学習院，浦和高，東京外語等でした。何れの試合も800ｍ，1500ｍでは水上氏の優勝と決まっていました。去る11月11日国立の母校で水上氏の追悼式に出席の為，本当に久方振りに母校を訪問し，懐かしいトラックを見て感無量，昔を偲んで若き血が騒ぐ思いでした。最近の母校選手の記録を見ても全く隔世の感を禁じ得ません。茲まで立派な競技部に育て上げられた前会長の苦労，努力には本当に頭が下がります。

新会長として迚も前会長の半分も及ばないと思いますが皆様の御協力を得て何とか責を果し度いと存じますので何卒宜敷く御願申上げます。

（ATHLETIK FREUND 1989より収録）

〝陸上のタナベ〟

三菱商事㈱
取締役会長　田部　文一郎

私はスポーツが好きです。ですから，いろいろなスポーツを楽しんできました。

私は広島一中から東京商科大学（一橋大学）予科へと進みましたが，広島一中はサッカーの強い学校でした。そこでサッカーと水泳に親しみ，予科から本科にかけてボート，テニス，走り幅跳び，やり投げ，100m競技に取り組みました。どれも，そこそこのところまではいきましたが，一流の域に達したものはありません。

それでも学生時代，ちょっと名を成したことがあります。私は一橋で，味の素の社長を務めた渡辺文蔵さんと6年間，同じクラスでした。

渡辺さんは水泳が得意で，一橋では第一人者でした。予科のとき，私は走り幅跳びで6m22というレコードを出しまして，しばらく一橋ではこの記録を破る人が出ませんでした。今の記録に比べると，それほどのものではありませんが，当時としてはなかなかの記録でした。そんなことから学内で〝陸上の田部〟〝水泳の渡辺〟といわれたものです。

もっとも一橋の強いスポーツといえばボートぐらいで，ほかはもう弱くて弱くて。そのころ一橋で新聞に名前が載る運動選手といえば陸上の水上達三さん（㈳日本貿易会会長）ただ一人でしたね。

私は学生の本分は学業にあり，との信念をもっています。だからといって運動をするなというわけではありません。むしろ大いにやれといいたい。今の若い人を見ていると，成績にこだわりすぎているのではないかと心配になります。昔から言われているように「よく学び，よく遊べ」の精神が必要でしょう。

とくに高校，大学のころは肉体的にも，精神的にも一番成長するときですから，何か一つスポーツに打ち込んで欲しいものです。人よりも強くなるために練習をし，工夫をする。そうした努力を重ねて初めてチームプレーやフェアプレーの精神を会得するものです。知らず識らずのうちに人格がつくられ，世間もその人を信用するようになります。

私は最近，社内で「優」の多い成績優秀な学生ばかりを採用するという考え方を，改めるように指示しています。運動をしてあるレベルにいった人は，その分だけ努力をしているのだから，その努力を「優」に評価して選考しなさいと。

私が予科に入学した時の競争率は13.5倍もあり，入学の難しい学校でした。入学後の学内

試験で1番から10番までは東京出身の学生でしたし，彼らの話は難しくて田舎モンの私は，とてもかなわんと思ったものです。でも学年の終りには10番以内に入りましたし，予科を出るときは2番でした。

学業とスポーツの両立。難しいことですが，やればできると思います。若者が青白い顔色では困ります。大いに運動して，健康な身体と健全な精神を養って下さい。

（三菱養和ニュース第34号より収録）

故水上達三会長を偲びて

尾　本　信　平
（昭和8年卒）

私たち一橋陸上倶楽部会員にとって，敬愛してやまなかった水上会長のご逝去はまさに青天の霹靂であり，痛恨のきわみであります。

水上先輩が経済界のみならず，広く各界に縦横無尽の活躍をされ，150余の役職を引き受けておられた超多忙の身でありながら，一橋陸上競技倶楽部とそのメンバーに寄せられた数々のご配慮や，倶楽部行事には必ずご出席いただいたこと等々，倶楽部育成に示された熱意に思いを至し，私たちはここに会長の足跡を追憶し，ご意志を継ぐよすがと致したいと存じます。

私が，会長から常々強く感じておりましたことは，水上さんがこよなく陸上競技を愛し，緻密な計画に基づく猛練習によりハイレベルなランナーであったこと，また，自ら造成に努力された国立グラウンドで土煙をあげた一橋アスリートに深い愛情を持っておられたことであります。

このことを示す実例は枚挙にいとまがありませんが，ここに数例述べさせていただきます。

まず，ご自分は中距離ランナーとして昭和元年7月の日本選手権大会の800メートルレースで3位に入賞されました。当時の日本記録に1秒6と迫るこの時の記録（2分2秒0）は，昭和37年に漆山君に破られるまで，実に36年間学内記録として君臨したのでありました。

また，一ッ橋に校舎があった時代，伊坂市助先輩はじめ諸先輩によりスタートした「夕走団」から，石神井，国立と拠点を移しながら，その間常に東京商大競技部の中心として活躍され，後発スポーツ部設立のよりどころとなりました。

さらに大正13年には神戸高商との陸上競技定期戦を早大戸塚グラウンドで開催，これが三商大戦へと発展し，現在の三大学戦（一橋大，神戸大，大阪市立大）へとつながっております。昭和元年には，国立にトラック新設の運びとなりましたが，その際には，神宮競技場をモデルとして造成に努力され，東京商科大陸上競技部の体制を確立されました。このトラックは，現在もなお第三種公認競技場として，昭和6年に建設された部

室とともに，われわれ一橋アスリートの拠点となっております。

戦争中に荒れ果てた国立グラウンドに学生が戻り，河鰭幸雄君，岩田正雄君たちが物資不足の中で陸上競技を復活したのを見て，第一物産創立直後の最中にもかかわらず，昭和６年に清田先輩により設立された陸上競技倶楽部の再建と現役部員の援助に寄与され，昭和22年関東インターカレッジ二部優勝をバックアップされました。

その後，昭和29年，国立合宿所設置に際しましては，その土地購入費として無期限・無利子の資金供与をはじめ，昭和42年にスタートした現役部員の沖縄合宿，国立トラックの排水工事，倶楽部基金の確立などにつき，常に物心両面にわたり，我が倶楽部の育成を図ってこられました。

この間，例年秋に，水上邸において倶楽部の懇親会を開催され，若手ＯＢや現役部員にとりまして，先輩と親しく交歓できる楽しい会合でありました。その他倶楽部員からの私的な依頼事，学生の就職斡旋などに対しては，その場で的確なアドバイスやご配慮をいただくなど，会長の一橋アスリートに対する深い愛情が，折にふれ，ことに応じてあふれ出て，私，尾本や小林君，吉見君らを誘導し，倶楽部結束の温かい絆となったことでありまして，私たちの終生忘れ得ぬ想い出であります。

私たちは今後，新たに就任された田部文一郎会長のご指導のもと，水上先輩の心を心として陸上競技倶楽部メンバーの一層の親交と結束を固めるとともに，現役陸上競技部運営の充実に寄与せんとする決意をご霊前に捧げ，水上会長のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（「如水会報」平成元年10月号より収録）

織田幹雄氏と水上達三先輩

岡　　浩
（平成2年卒）

昭和3年卒の水上大先輩から資料を渡されて代筆するように頼まれましたので，恐縮ですが書かせていただきます。

今年（昭和63年）11月3日の文化の日はスッキリとした秋晴であった。大井の箱根駅伝予選会場では我が部のランナーが20キロにチャレンジした。ちょうどその頃，我が部の名誉会員でもある織田幹雄氏がめでたく文化功労者として表彰された。

コーチとして走りを見てもらい，指導を受け，貴重なアドバイスとお話をいただいたことのある私としては，大変うれしかった。自分の部屋に額を入れて飾ってある「強いものは美しい」は生涯の宝物である。また，これほど立派なひとに指導してもらえた自分は幸せ者だとつくづく感謝をしている。

この織田氏の奥様は大切に保管されていた資料（新聞の切り抜き）の一部を水上先輩へプレゼントされた。それは水上先輩が現役で走っておられた頃の陸上の記録である。織田氏の記録と並んで水上先輩の記録が載っているので抜粋してみる。

◎　第7回関東専門学校陸上競技選手権大会（神宮競技場）

100m第一予選入選者　　織 田（早大）……

800m予選入選者　　水 上（商大）……

◎　全日本陸上競技選手権大会（神宮）

800m決勝　1. 2′0″4（日本タイ記録）　縄 田 尚 門（早大）

2. 川 岸 茂 夫（早大）差11m　3. 水 上 達 三（商大）

◎　全日本選手権陸上競技大会

800m予選（入選者）　水 上（商大）……

1500m予選（入選者）　水 上（商大）……

◎　第7回関東専門学校陸上競技選手権大会

100m決勝　1. 佐 藤（明大）10″9（本大会新記録）

2. 南 部（早大）　3. 大 澤（早大）　4. 柿 原（慶応）

5. 織 田（早大）

800m決勝　1. 岡 田（慶応）2′9″5

2. 橋 本（早大）　3. 水 上（商大）

走高跳　　1. 織　田（早大）1m86（本大会新記録）

ホップ決勝　1. 織　田（早大）14m41

織田氏がオリンピック選手ということを考えるといかに水上先輩が活躍していたかがわかる。アスレチックフロイントの歴代20傑に水上先輩の記録が残っているが，これは現在の同タイムとは価値が違うので数年後に消えてしまうのは寂しい気がする。

「ハヤブサの達」と言われ，三井物産の頂点を極めた先輩は陸上においてもすばらしい結果を残している。我々後輩も見習うべきではあるまいか。

また，60年近くも大切に夫の若い頃の記録を保存していらっしゃる織田氏の奥様は，きっと優しい心の持ち主に違いない。織田氏の今回の文化功労者受賞もおそらく奥様の存在が少なくなかったのではあるまいか。

（ATHLETIK FREUND 1988より収録）

全国高商大会開催の回顧

尾　本　信　平
（昭和8年卒）

「はじめに」第1回全国高商大会が開催されたのは昭和7年7月であり，今から60年も前で私が学部3年の時であった。戦後は高等商業という制度もなくなり現在の学生諸君には考えられないものであり，またこの大会の開催に大変な情熱を傾けた当時の部員諸君も大部分故人となっており，当時のことを思い出し得るのは私だけのように思えるので，この機会に出来るだけ思い出を記録しておきたいと思い口述し筆記してもらったものである。部の歴史としては幾多の輝かしい競技記録や勝敗というものも勿論大きなものであるが，この全国高商大会のような全国的な事業を発想し，準備し，実行し得たということも部の歴史の1ページとして記録されてもよいことではなかろうかと思うのであえて一文を草した次第である。

「開催の発想」私の予科入学当時（昭和2年）全国高校大会，即ちインターハイというものがあり全国の高等学校（旧制）の他北大の予科がこれに参加し，その主催は東京帝国大学及び京都帝国大学両大学の陸上競技部で，毎年交互に東京及び関西で行っていたのである。私は東京商大予科としてこの高校大会に出場しようと思い，川本信正さんや後藤文雄さんに何回か東京帝大側と交渉してもらったが結果は常に否定的であった。一方全国には高等商業学校という専門学校が高校とほぼ同数あり，その大部分が官立であったが高商の選手等は自分等の競技大会をもっていなかったのである。

そこで確か昭和6年の始め頃であったと思うが，高校大会に倣って文部省後援による全国高商大会の開催を企画し各方面への運動を展開することにしたのである。共催大学である神戸商大は勿論賛成であり，実行運動は完全に東京商大側に任された形になった。そこで全国高商に対してガリ版刷りの出状となったのであるが，私は自分で書いたように思うがどんなことを書いたか今思い出せない。確かそのガリ版のコピーは部室のファイルに残しておいたと思うが調べてみてほしい。文部省との折衝は誰が当ったか正確には思い出せないが私と同級の田中忠平君（昭8・故人）や上田重昌君（昭9・故人）金子珪亮君（昭9・故人）であったように思う。その結果として文部省としては賛成であり予算として200円の他に勝賞旗を授与するとのことであった。大学当局にはあまり積極

的な働きかけはしていなかったと思うが部長である高瀬荘太郎先生（故人）には時折り報告していたように思う。

この際の問題は専門部は当然参加するものとしても予科をどうするかということになった。予科は学制からいっても専門学校ではなく高等学校であり私は何とかして予科は高等学校大会の方に参加させるべきであるという考え方を捨てきれないし，また平常東京商大として予科・専門部•学部の三つが一体となって活躍していたのがこの高商大会に予科と専門部が別々に出場するということに何となく不協和を感じ専門部だけの出場としたのである。この点について若干の異論が有ったやに思う。（注１）さて当時の高等商業として参加予定校は確か22校だったと思う。今これを掲げてみると次のようである。台北・上海（東亜同文書院）・京城・彦根・長崎・大分・山口・神戸（県立）・和歌山・大阪（大阪商大専門部）・同志社・高松・松山・名古屋・高岡・横浜・横専（横浜専門）・東商大専（専門部）・大倉・福島・小樽・高千穂。（注２）

「競技場の準備」前述の通り開催方針は決定され，具体的な競技場・器具等についての準備に入った。一つの考え方としては神宮競技場（現国立）を使用すべきであるという意見もあったが，私としてはこの際国立競技場を完全なものにしたいという考え方が支配的であり大学当局もこの考え方に賛成してくれたように思う。そこでまず競技場の公認という問題に取りかかったが，計測の結果１ｍ余り長かったのでその修正工事に取りかかると共にフィールドの芝生の凸凹を直すこと等を始めた。その結果５／６月頃だったと思うが陸連の公認委員を招じて実測検定を行うことになったのである。ところがその結果は400ｍより若干短いということで公認を受けることが出来ないこととなり，これには大あわてしたのである。そこで当時マネージメントの方をもっぱら担当してくれていた金子珪亮（昭９故人）及び上田重昌（昭９故人）の両君に頼んでスティールテープメーカーに行き公差を調べたところ天候によってかなりの公差が出ることが判明したので，陸連に対し雨の日に再計測するように依頼した結果400ｍトラックとしては極めて正確なものであることが判明し，ようやく安堵の胸をなでおろしたことも思い出される。その他器具類としてはハードル60台を新調しなければならない状態であったが，当時早稲田大学陸上部を出て三省堂に入社した沖田君が国立迄やってきて三省堂の運動具部を起用するようにとの懇望があったのでそれに従った。その他ハンマー投げのフェンスやハイジャンプ・棒高跳びのスタンド等も新設したように思う。その他円盤・砲丸・

ハンマー・槍等の器具を出来るだけたくさん仕入れた。その他セパレートコースのコースの引き方や400ｍハードルのハードルの位置の測定等に随分苦労したように思う。これ等については小宮一彦君（昭10故人）が詳しく部報に書き残してくれた筈である。

さて高校大会では優勝者に対してその高校の名誉を表彰する為にその校歌を吹奏し校旗を掲げることをやっており高商大会でもそれを実施しようとしたが楽隊を雇うとなると大変な費用がかかる。これには私も頭を悩ましたわけであるが結局大学の音楽部を説き伏せて各校の校歌を演奏させ，これをレコード会社にレコード化させることにしたのである。それにしてもそうとうな費用がかかるので確かある生命保険会社の大会のポスターを作らせこれを省線電車の中や各駅に張り出させ，レコード化費用を捻出させたように思う。これは田中忠平君が担当してくれたが，そのレコードの出来ばえは余り感心したものではなかった。したがってその後各校が各自段々と新しく作り出したのではなかろうか。

「大会当日前後」さて大会当日がせまって来た。確か一週間前に国立で東京対神戸商大の定期戦が行われ，東京方が大勝したのである。その前年は中森長太郎君（昭７故人）が主将で大阪で挙行，大敗を喫したので何としても勝たなければという気迫を持って選手一同臨み目出たく優勝したのである。私も走り高跳び・走り幅飛び・800ｍリレーに出場しリレーだけはバトンを落して負けたがその他は優勝出来たように思う。800ｍリレーでも一番を走り神戸方の毛利君と競り合ってほとんど同時か若干有利に二番にバトンタッチ出来たように記憶している。毛利君は100ｍの優勝者であり，この200ｍで彼に若干でも勝つことが出来たことは私の短距離も相当のものであったと今でも誇りに思っている。神戸戦の翌日から神戸の選手と一緒になって高商大会の具体的準備に入ったが，その最初の問題は地方から出て来た選手諸君の宿舎のことであった。これには国立中の下宿屋を総動員してこれに当てることが出来，高商選手諸君に喜んで戴いたと思う。これも前述の金子・上田両君の力であったのではないか。

大会３／４日前になると続々と高商選手諸君が集り練習を開始はじめた。私は各高商チームがそろってウォーミングアップを始めたのを見ていて何ともいえない感慨にふけったのを思い出す。

さていよいよ当日の朝となったのであるが高瀬先生（陸上競技部長）より大学の乗用車で文部大臣を出向えに大臣官邸に行くよう命ぜられ，先生と一緒に大学の車に乗って

官邸まで行ったのである。時の文部大臣は有名な鳩山一郎氏（後の総理，故人）であり一学生として光栄の至りと感じたことである。

ところが国立に降り立った時は大雨であり，グランドにての開会式は出来そうにない状態で止むなく兼松講堂で開会式を行うこととなったのである。兼松講堂には20校余りの部旗が林立しその前で鳩山文相の名調子の開会の辞が述べられたが，私は競技場の方が心配でどんな演説が述べられたか全く覚えていない。ただ大変な名演説だったことだけを今もって覚えている。

競技の審判長は相馬勝夫先輩（昭５故人）であり，雨も小降りになり支障なく挙行されたように思う。当日及びその翌日に行われた競技記録については昭和７年の部報に載せてあるのでここでは割愛する。

「おわりに」さて今から60年も前の全国高商大会の思い出を書き記してみたが私はこの第１回高商大会の翌年（昭８年）卒業し，三井鉱山に入社したのであるがその１～２年後にこの大会に出場したという新入社員が数名三井鉱山に入社して来て私を驚かせ，かつ喜ばせ，この人達と当時を追想して楽しく語り合ったのである。彼等もこの大会を開いてくれたことに対して大変喜んでおり，その発展を見守りたいという気持を十分持っていた。しかしながらこの大会も大東亜戦争（太平洋戦争）で中止されてしまい，さらには戦後の学制改革によって高等商業はなくなり再開の機会もなくなってしまった。このことは先に述べた高校大会も同様である。

しかしながら私は在学中にこの大会を発想し，実行し多くの高商選手諸君に喜ばれ情熱をつくす機会を与えたということに多大の感銘を覚えるのである。また競技部という活動の中に競技そのものだけでなく，このような組織的イベントの発想・実行ということも大学運動部の一つの教育課程であるとも思えるのである。この一文が現役学生諸君にそんな意味で役に立つことが出来れば喜びにたえない。　（口述筆記）

尚本文については前幹事長の阿部湘一郎君（昭29）に種々調査をお願いし，協力して戴いたことを感謝と共にここに記しておく。

（注１）　脱稿後久留先輩にお伺いした所予科は昭和９年（第３回）から高商大会に出場している。

（注２）　神戸大ＯＢの矢柴氏にお借りした第１回大会プログラムによれば，出場校は20

校であり，東亜同文書院と京城高商は案内状は出したが結局第１回大会には不参加だったようである。

又第８回大会（昭14年）の出場校は26校と記録されている。　　（阿部 記）

（ATHLETIK FREUND 1992より収録）

輝く制覇!!
第23回 関東インターカレッヂ戦記

◇ トラックの部

中牟田　研　一
（昭和16年12月卒）

我々はインターカレッヂに必勝の意気で臨み且つ二部ではあったが未だ先輩のなし得なかった優勝をなしたのである。其の中心動力がフィールドよりもむしろトラックにあった事は争い難き事実である。此処数年来のトラック陣の充実こそ我々をしてインターカレッヂに於いて優勝せしめた最大の原因である。其れはトラック十種目中六種目のタイトルを奪った事実を見れば明らかである。それは帝大がフィルドに於いて八種目中五種目に優勝したのに対し充分対抗し得て餘力を有していたのである。此の強力トラック陣に於いて又特に永田の奮闘をたゝへねばなるまい。彼の奮闘は我が短距離陣の特に香川の不振を補って餘り在るものであった。

今其の戦跡を回顧して見よう。

第 1 日

100 m準決勝，予選は前週行われたので準決勝より始められたA組に於ては永田がゴール前90 mより清水（横専）を胸一つ抜き11秒3で一着B組では考巧前田は前半よく出るも遂に練習不足は如何ともし難く又伊庭野はスタートより元気なく破れ去るB組一着南方（大正）11秒4。

400 m準決勝，中山，神谷はA組に出場山田（農）の好調及田川（帝）の快走あって激戦の後二人共川田の追撃をしりぞけて入賞，B組は永田前半セーブしつつも後半快走して一着伊庭野は前半グングン出したが後半に力尽き陣，照井にわずか破れて四着なりしは矢張練習不足か。

1500 m決勝，松島，裏辻出場，裏辻は日頃の消極戦法を捨てトップに立ち金光（東洋），山田（農大）を向こうに廻し奮闘，松島は腹痛のため元気はなかったが老巧に中位を保ちつゝ力走したが裏辻は遂に力尽きて中半以降振わず松島も腹痛のため元気なく遂に入賞を失す。一着金光（東洋）4分22秒。裏辻の意気を買う。

100ｍ決勝，永田のみ出場，スタート割合に善く例の90ｍ辺からの加速度的スピードでグイと抜いて優勝タイム11秒4，清水（横専）の不振が目立ち松﨑（東歯）が二位準決Ｂ組で前田，伊庭野が佐藤に破れ，佐藤が意外四位で３点を帝大に献上したのは痛い。

400ｍ継走決勝，予選で帝大に破れ且香川の不振は戦前不安なる気持を持たせたがスタート新技出だし善く快調にアウトコースに迫り永田にバトンがわたるや永田たちまちアウトコースを抜く，三隅受けてアンカー香川にわたす，香川，清水の追撃を強引にしりぞけ優勝。タイム46秒1，2位横専宿敵帝大は三位に落ちた。

第２日

第１日目は我軍の得点種目少くかなり帝農にリードせられていたが今日こそは一泡ふかすと皆張り切る。特に200，400，中障，高障害に於ては10点以上の得点が予想せられる。

中障害決勝，此の種目には宿将黒住以下中山，神谷，三隅の４者出場，黒住は久し振りに快走58秒9の好記録で優勝，中山，川村と争うも破れ61秒4で３位，神谷，陳（東歯）を抑へ三隅は高障碍に備へ１点に満足し此処合計14点の大量得点を挙げた。（黒住の58秒9は商大新記録）。

200準決勝，伊庭野昨日の不振を一気に回復し23秒7で１位，永田23秒9，黒住中障害の疲労のためいささか不振であったが24秒6で３位，ホープ香川は全然生気なく破る。

10000ｍ決勝，これは思わざるひろいものであると同時にインタカレッヂ優勝のための導き４点であった。松島，裏辻昨日の疲労もいとわず元気に力走遂に長年の努力甲斐あって入賞，一着金光34分36秒6，松島４位，裏辻６位，優勝した時帝大との差２点であった事を思えば貴重なる優勝のかぎであった。

800ｍ決勝，向田出場大いに張り切るも実力未しく下位に甘んず，此処に農大は１，２，３位を占め大量点をなす。１位山田（農）2分4秒。

200ｍ決勝，黒住，永田，伊庭野出場，前半のカーブを出切るまで永田，南方，伊庭野の順，カーブを出切る直後伊庭野グイと出て永田南方を抜き，永田抜き返さんとするも遂に伊庭野優勝，２位永田，３位南方，タイムそれぞれ23秒69，黒住の不振５位は中障碍の後とは云へ佐藤（帝）をしてまたまた３点をかせがしめたのは大きい。

高障碍。三隅の優勝はいつもながら危ない。唯いつもながらスタートで後れる事は一

考を要したい。スタートで後れず然も後半にスピードが乗りフォームのくずれぬ様な独自の工夫を望む。新技は山中（日医）と競ってわずか破れたが相手が17秒2であったからもう少しがんばれば記録を残せたのにと惜しい気がする。1位三隅16秒4。

400ｍ決勝。永田再三の出場，中山，神谷再度の出場向う敵は照井，山田（農），陳（東歯）レース開始，永田は前半をセーブ，神谷，中山出て照井後る。山田は好調，問題外と思われた陳は意外の力走をなし遂には永田の追撃すら退け54秒0にて2位。永田は疲労のため後半をおそれて前半セーブし過ぎの感があった。中山5位，神谷6位，10点以上と思われたこの種目の7点は少しく面白くない通算であった。永田（3位）54秒2。

1600ｍ継走。此の種目で優勝が決まる。（槍投が今の現状ならば）というので皆張り切る。トップ今日好調の伊庭野後半くずれ川田に抜かれる。二番中山，佐藤を追撃バックストレッチは千で之を抜き，永田，黒住と危機なく優勝タイムが30秒台でないのが何となく寂しいが是れで優勝は先ず先ず確定する。タイム3分40秒2。帝大は佐藤が農大にも抜かれ川村，照井に食い下がり帝大の闘将筧必死となって山田を追うも遂に3位であった。

我々がこの戦果を挙げ優勝出来たという事は我々自体の努力もあるが昨年以来の先輩特に昨年先輩が培かって呉れた努力と精神とが今年果を結んだのであり又久内先生の懇切なる御指導に依るものと深く感謝せねばなるまい。優勝後，高瀬学長御自らグランドに立たれて歌われた勝利の凱歌，東の国旗の上に昇った丸い月等々，我等は此の感激を一生忘れないだろう。

◇ フィールドの部

數　原　年　郎
（昭和17年卒，故人）

二部制覇遂に成る！　この栄誉，感激こそ我々一橋アスリートの念願ではなかったろうか。先輩も幾度か試みたその度に不運にも破れてきた，今年の春沼津に於ける合宿に於いてI.C制覇を共に誓った我々の練習は日の経つ共に熱を増して行った。苦しい事も屡々であったに違いない。而しこの苦しみからやがて生まれるであろう二部制覇，或いは三商大戦優勝という目標を心に描いて練習を続けて来た。この練習が遂に成果をあげる日が来た。6月8日。黄昏迫る神宮競技場に感激の万歳を叫んだのだ。フィールド内で先輩と共に歌う部歌も何時の間にか涙声になり，唯々感激に浸るのだった。

この制覇こそ我々班員の間に於ける和と又先輩諸兄の熱烈な御指導，御鞭撻によることが非常に大きいことを痛感するのである。特に当日は高瀬学長，中山班長を初め，先輩諸兄の熱烈な御声援に対して班員一同心から感謝している所であります。

我々はこの栄誉に驕る事なく今後も一層の努力を誓う次第です。フィールド戦記を頼まれましたが主にトラックの声援に熱中していた関係から単に記録をのせる準備しかないことをお詫び致します。

○　豫　選　会　（フィールド）

豫選会は大会の前週即ち6月1日，文理大，保谷競技場に於いて行われた。我軍期待に背かぬ奮闘をし，大量の豫選通過者を出す。

◇　走　高　跳　　通過者（黒住）

黒住，大木，出場。大木元気なく失格

◇　走　幅　跳　　通過者（新坂，杉村，大木）

6mを僅か越えた所でせり，新坂，大木軽く通過するも闘将杉村不調で危なく通過す。

◇　棒　高　跳　　通過者（三隅）

三隅一人参加し軽く通る。

◇　三　段　跳　　通過者（大木）

木下出場するも及ばず。

◇ 砲 丸 投　　通過者（高橋）

我が投擲陣のホープ高橋上位入賞の可能性十分。

◇ 円 盤 投　　通過者（永田，高橋）

◇ 槍　　投　　通過者なし。

柴沼，高橋，木本出場するも奮闘空し。今後槍投の選手を養成せざるべからず。

◇ 鉄 鎚 投　　通過者なし。

高橋一人出場するも練習不足にて惜しくもふらる。

○ 決　　勝

第 1 日（6月7日）　晴

インターカレッヂと云えば最近雨天を想起するが当日は絶好の快晴で，豫選会の結果優勝候補随一に挙げられ我軍の意気愈々昂る。

◇ 走 高 跳

バーは1ｍ60より上げられ，65〜70の間で入賞が争われた，黒住惜しくも65を失敗し入賞を逸す。一等1ｍ70（大正大　今井）

◇ 棒 高 跳

三隅我軍奮闘す。3ｍを2回目に，3ｍ10を3回目に越す。3ｍ20に至るや見事1回でクリヤし三等に入賞す。一等3ｍ30

◇ 砲 丸 投

高橋出場。期待に背かず活躍し，二位に入賞す。投擲陣の淋しい我軍にあってよくやって呉れた。10ｍ64。

◇ 三 段 跳

大木出場。春以来めきめき強くなった。大木よく跳んで12ｍ80で6位に入賞す。

◇ 圓 盤 投

永田，高橋出場。練習中32.3ｍを軽く出して好調であった高橋に大いに期待したが，記録こそ練習中に及ばなかったが30ｍ88で3位に入賞す。

砲丸と言い，圓盤と言い若冠高橋の活躍は目覚ましい。今後益々精進せん事を切望す。トラックの闘将永田もよく頑張り28ｍ20で6位に入賞す。彼のトラッ

ク，フィールドに於ける健闘は賞讃に値する。

第 2 日（6月8日）　晴

第2日目も昨日に劣らない上々の天気で優勝校の呼聲は我軍に高い。全員死闘を期す。

◇　鉄　鎚　投

我軍出場者なし，優勝競争校帝大の独壇場となる。鉄鎚にしろ槍にしろ，出場者のないことが如何に大きな痛手であるが，我々が帝大の追撃をかくまで許した大きな原因は茲にあるのだ。

◇　走　巾　跳

走巾跳の始まる頃より優勝の帰趨混沌とす。商大か。帝大か。我軍としてはフィールドに於ける唯一の稼ぎ所である。記録は例年に較べて一体に低調であった。昨年小谷兄を筆頭に新坂，杉村とこの種目に出場して無得点に終わったのであるが，今年は新坂，杉村，大木の三人出場して三人とも入賞，貴重な11点を稼ぐ。即ち，杉村6ｍ28で2位。大木もよく頑張り，6ｍ23で3位。新坂不調ながらも老巧振りを発揮して6ｍ10で5位に入賞す。

◇　槍　　投

出場者なし。鉄鎚と同じく拱手傍観する他無く，只管他校の帝大軍に食い入るのを頼む許りという些か寂しい種目である。I・Cと言い三商大戦と言い，是が非でも槍の選手を養成すべきである。

◇　　◇　　◇

斯くして我々は優勝することが出来たのだ。先輩が為さんとして遂に今日まで為し得なかった大業は漸く昭和16年に至って成就することが出来たのだ。

之は決して偶然の事ではなく長年に亘る先輩諸兄の着々と築かれた土台の上に我々部員が一丸となって精進結束した賜だ。その証拠には唯の一点でもゆるがせにしておいて見給へ，「一点を笑う者は一点に泣く」で恐らくは悲憤の涙に暮れていた事であろう。このI・C二部制覇によって大いなる自信を持つ事が出来た事を喜ぶと共に今後の精進を誓って止まない。それにしても我軍の総得点91点の内，フィールド26点は些か寂しい氣がする。尤もこの26点は懸命の努力の結果であって，我軍の実力としては最上のもので

あったが，唯トラックの成績から見て優勝の筈が案外苦戦したというのもフィールド，殊に槍投，鉄鎚投，走高跳等に人無きが故を痛感させるのである。今後この方面の人を養成する必要が大いにあると思う。

因みに我軍のフィールドに於ける得点をまとめると次の如くなる。

走高跳	0
走巾跳	11
棒高跳	4
三段跳	1
圓盤投	5
砲丸投	5
槍投	0
鉄鎚投	0
計	26

（ATHLETIK FREUND 1941より収録）

早大制覇を奪還す

－関東學生陸上選手権大會終幕－

（昭和16年6月9日 朝日新聞記事）

第23回関東學生陸上競技對校選手権大會第３日は８日午前9時50分から明治神宮外苑競技場で前日同様快晴微風の天候に恵まれて挙行，早大リードの後をうけたこの日，文大の反撃物凄かったが早大は400ｍの大量得点，10000ｍの４位入賞で点を蒐め最後の1600ｍ継走にも断然２位の文大を離して覇権を奪還，トラック，フィールドの両優勝も併せて獲得し，立大は最下位で二部転落した。

二部は商大が，優勝11年振りで一部に返り咲くこととなり，本社寄贈のトラック優勝盃を獲得，三部は新加盟の日体が壓倒的に勝利を占め二部最下位の學習院と入替ることとなった。

第　一　部

◇　中障碍決勝

① 川村　章（文）55秒4
② 河　岡（早）56秒4
③ 西　谷（文）56秒7
④ 千葉　久（文）
⑤ 西　本（早）
⑥ 野　田（早）

◇　走高跳決勝

① 原　學（明）1ｍ90
② 鈴　木（早）1ｍ85
③ 長谷川（文）1ｍ85
④ 澤　瀧（明）1ｍ85
⑤ 鈴　木（法）1ｍ80
⑥ 山　本（早）1ｍ70

◇　槍投決勝

① 杉田　登（早）57ｍ80
② 檜　森（文）54ｍ98
③ 渡　邊（文）54ｍ45
④ 金　守（文）52ｍ85
⑤ 井　上（日）52ｍ
⑥ 荒　川（早）51ｍ75

◇ 鉄鎚投決勝

① 呉振　武（文）46m50
② 坂　井（文）44m23
③ 二　瓶（早）43m87
④ 朝比奈（早）42m71
⑤ 水　倉（日）42m31
⑥ 吉　田（法）42m01

◇ 三段跳決勝

① 金山源権（慶）14m77
② 青　木（慶）14m21
③ 里　見（早）14m18
④ 工　藤（文）14m14
⑤ 澤　瀧（明）13m95
⑥ 市　野（文）13m83

◇ 400m決勝

① 山本耕三（早）50秒4
② 船　田（文）50秒5
③　李（早）50秒5
④ 三　木（早）
⑤ 吉　田（早）
⑥ 大　熊（文）

◇ 棒高跳決勝

① 澤田文吉（文）4m10
② 中　村（早）3m90
③ 和　田（早）3m90
④ 影　山（早）3m80
⑤ 安　納（中）3m80
⑥ 坂　東（日）3m80

◇ 800m決勝

① 勝亦清政（文）2分0秒2
② 成　田（日）2分1秒3
③ 高　橋（文）2分1秒3
④ 望　月（早）
⑤　金（法）
⑥ 手　島（日）

◇ 200m決勝

① 山本耕造（早）22秒5
② 岩　崎（慶）23秒0
③ 日　野（日）23秒4
④ 大　熊（文）
⑤ 吉　田（早）
⑥ 井　後（文）

◇ 高障碍決勝

① 川村　章　（文）　14秒9【大會タイ】　④ 河　岡　（早）
② 木　南　（文）　15秒1　⑤ 野　田　（早）
③ 平　田　（明）　15秒6　⑥ 荒　木　（慶）

◇ 10000ｍ決勝

① 末永包徳　（中）　32分21秒8　④ 松　下　（早）
② 大　澤　（日）　32分56秒6　⑤ 細　野　（専）
③ 安　達　（専）　33分0秒8　⑥ 杉　山　（日）

◇ 1600ｍ継走決勝

① 早　大　（山本，李，吉田，三木）　3分26秒4
② 文　大　3分32秒6
③ 日　大　3分34秒8　⑤ 立　大
④ 慶　應　⑥ 中　大

◇ 第一部各校得点

① 早　大　119　（競走62，跳投57）　⑥ 法　大　13
② 文　大　107　（62，45）　⑦ 中　大　10
③ 日　大　57　（40，17）　⑧ 専　大　6
④ 慶　大　42　（19，23）　⑨ 横商専　3
⑤ 明　大　19　⑩ 立　大　2

第　二　部（決勝記録）

◇ 中　障　碍

① 黒住忠行　（商大）　58秒　③ 中　山　（商大）
② 川　村　（東大）

◇ 10000ｍ

① 金光益俊　（東洋大）　34分29秒　③ 栗　田　（農）
② 山　尾　（學習院）

◇ 走 巾 跳

① 大塚英世 （東大） 6m59　　③ 大 木 （商大）

② 杉 村 （商大）

◇ 800m

① 山田壽一 （農大） 2分4秒0　　③ 池 部 （農大）

② 照 井 （農大）

◇ 200m

① 伊庭野 （商大） 23秒7　　③ 南 方 （大正大）

② 永 田 （商大）

◇ 高 障 碍

① 三隅義信 （商大） 16秒4　　③ 山 中 （日體）

② 吉 田 （東大）

◇ 400m

① 山田壽一 （農） 53秒9　　③ 永 田 （商大）

② 陳 （東歯）

◇ 1600m継走

① 商 大 （伊庭野，中山，永田，黒住） 3分40秒8

② 農 大　　③ 東 大

◇ 槍 投

① 山崎文男 （横専） 49m22　　③ 小 田 （横専）

② 横 平 （東大）

◇ 鉄 鎚 投

① 蜂谷三郎 （東大） 34m06　　③ 中 内 （東大）

② 金 （東洋大）

◇ 二部得点合計

① 商　大	91	⑥ 東　歯	24
② 東　大	88	⑦ 大正大	18
③ 農　大	68	⑧ 日　體	11
④ 東洋大	36	⑨ 慈　大	8
⑤ 横　専	28	⑩ 學習院	5

第　三　部（決勝一等記録）

◇ 中　障　碍

楊川　進（日大）　60秒5

◇ 800m

江村　新（青學）　2分7秒6

◇ 高　障　碍

本間義隆（拓大）　17秒1

◇ 400m

江村　新（青學）　53秒1

◇ 走　巾　跳

鶴田信義（日体）　6m48

◇ 10000m

風間　實（日体）　記録なし

◇ 1600m継走

青學（川崎，岩清水，日暮，江村）3分45秒8

◇ 鉄　鎚　投

村上陽三（拓大）　20m13

◇ 槍　　投

宮本光雄（駒45m18）

◇ 200m

角　田（横高商）　24秒2

◇　三部得点合計

① 日　体　108
② 青　學　46
③ 横高工　45
④ 拓　大　30
⑤ 横高商　22
⑥ 大　倉　15
⑦ 外　国　14
⑧ 駒大，東灘　13
⑨ 體　大　11

以下略

先攻に開始八回三で法大勝つ　閉戦大時十分

法大	000	100	322		8
立大	000	021	000		3

◇…柚木、好村はいづれも継投にもかゝはらず滑り出しはよく、時に好村の投球は伸びて、四回より両に調子がよく快投を続る法大も、打あぐみの体であつた

一敗せる立大は雪辱の念に燃え異常なる闘志をかり立て、玉砕的によく攻めた、第一回は二死後ではあつたが、四球に出た鶴島が、二盗敢然、三盗を試み法大の心胆を寒からしめたかと思ふと、第二回にも二死後永利が中堅越に三塁打を放ち気勢をあげ、戦況は寧ろ立大に有利なものが窺はれたのである

◇…第三回も佐藤は無死で安打して出たが、次打者のバントを待たず盗に倒れたが、鳥丸の四球後、山

【法大】（先）

	打	点	安	犠	三	四	盗	失
(中)田川	4	0	1	0	0	1	0	1
(二)鳥丸	2	1	1	0	1	3	0	0
(三)[illegible]	4	0	2	0	0	1	0	1
(左)[illegible]下	5	1	0	0	2	0	1	0
(一)[illegible]坂	4	2	1	0	0	1	0	0
(捕)[illegible]	2	0	0	0	1	0	0	1
(捕)[illegible]	2	1	0	0	0	1	0	0
(投)柚木	2	0	1	0	0	0	0	0
(投)[illegible]	2	1	0	0	0	1	0	0
(右)[illegible]田	5	1	1	0	0	0	0	0
(遊)[illegible]田	4	1	1	0	0	0	0	0
合計	36	8	8	0	4	8	1	3

【立大】

	打	点	安	犠	三	四	盗	失
(三)山下	3	0	0	0	0	2	0	0
(二)辻	4	1	1	0	1	1	1	0
(中)鶴島	3	1	0	0	1	2	3	0
(投)好村	4	0	2	0	1	0	0	0
(投)(三浦)	1	0	0	0	0	0	0	0
(遊)麻方	4	0	0	0	1	1	2	4
(一)西本	4	1	1	0	2	0	0	0
(右)永利	2	0	1	1	0	1	1	0
(捕)[illegible]	4	0	0	0	3	0	0	0
(左)佐藤	4	0	3	0	0	0	0	0
合計	33	3	8	1	9	7	7	4

▲三塁打　山脇、永利▲二塁打　田川▲犠安打　柚木五回半6佐藤三回半2好村七回半6三浦一回半2▲併殺（麻方、辻、西本）

から出て吉田を抜いた、宮本はすだ調子に乗つてをらず吉田も昨年より好調だが本来の調子に戻つてみない、二百米本件は新人樋口が劇の如く出しピッチで前半1分め秒4で泳ぎ後半やゝ疲れたが2分50秒を切つて好記録を録けたのは上出来だつた、岩崎は初顔新記録よく三位に入り、岸は初く百米自由形に[illegible]の席を獲してゐたがこれ又吉田の快勝となり重みを断たれた、吉田は五十米で頭だけ抜くそのまゝぐんぐん出て快勝、兒島は九十米過から杉田を追ひ縋に二位に入つた、吉田、兒島ともに新旧部門の選手が勝つたのはその強い練に因するといつてよいが、百米選手の敗戦は全く不甲斐ない、百米背泳は兒島昨年の覇将をなしたが七ワ出しのよかつた吉田の敗因はターンの失敗にあつた、二百米自由形では宮本百米を1分4秒6で吉田、杉田を二体身はなはず半田、片山の[illegible]後のターンでは片山一体身リードしてゐたが勝を持してゐた半田[illegible]

大阪府優勝す

全國産業相撲大會

第二回全國産業相撲選手権大会[illegible]は八日午前九時から両国国技館で[illegible]された、団体対抗は[illegible]十七府県代表一名によつて行はれ、団体試合は[illegible]勝戦を試合が行はれ、団体戦では両年の覇者[illegible]は一回戦で[illegible]に敗れ[illegible]、個人戦の[illegible]に名をなさしめ、大阪府はその[illegible]勝々団体覇者の[illegible]を誇つた、個人戦では大阪の山本の力闘が[illegible]以下[illegible]人の[illegible]が入り[illegible]た

〃戦前一日は八日午前九時より大久保射場で参加役部員二百余名出場による[illegible]式あり、次いで開東部[illegible]中將の始発式あつてのち、明大対立大、東大対法大の二試合を[illegible]、東大、明大共に[illegible]した

◇団体準々決勝一回戦
[illegible]2－1[illegible]
[illegible]2－1新[illegible]
東京2－1[illegible]
[illegible]3－0[illegible]
[illegible]2－1京都
[illegible]2－1[illegible]山
愛知2－1[illegible]
[illegible]3－0[illegible]

◇同二回戦
兵庫2－1[illegible]
大阪2－1東京
茨城2－1石川
[illegible]2－1[illegible]

◇準決勝
大阪3－0長崎
福岡3－0茨城

◇決勝
大阪2－1福岡

◇個人試合決勝
○瀬戸口（下手投）[illegible]
○山本（小手投）[illegible]
太田（[illegible]）[illegible]
山本（大阪）押出し[illegible]（千葉）

明大　二九三―二四三　立大

【立大】		【明大】	
本[illegible]	39	[illegible]	29
[illegible]	22	本野	26
[illegible]	20	[illegible]	23
[illegible]	22	[illegible]	8
[illegible]	18	[illegible]	33
[illegible]	38	[illegible]	40
[illegible]	38	[illegible]	38
[illegible]	27	[illegible]	30
[illegible]	10	[illegible]	28
[illegible]	9	[illegible]	38
計	243	計	293

東大　二九一―二四〇　法大

【法大】		【東大】	
[illegible]	31	[illegible]	35
[illegible]	28	[illegible]	30
[illegible]	26	[illegible]	16
[illegible]	15	[illegible]	36
[illegible]	22	[illegible]	6
[illegible]	21	[illegible]	35
[illegible]	23	[illegible]	35
[illegible]	18	[illegible]	36
[illegible]	26	山上	26
[illegible]	32	[illegible]	36
計	240	計	291

矢島、小林組優勝

東西學生對抗卓球代表決る

全関東学生庭球選手権東西学生対抗代表決定戦第一日は八日午前九時から神田YWCAコートで選手権を挙行、関東代表は準々決勝に進んだ八組と決定した

◇準々決勝
長洪、早（大東）2－1 [illegible]田（山村）（大早）
小矢、林島（大早）2－1 [illegible]（田木）（大立）
富山、本（大立）2－1 白[illegible]（角川）（大慶）
[illegible]松山（大早）2－0 [illegible]（渡本）（大早）

◇準決勝
富山、本（大立）21 21－12 15 [illegible]松山（大早）
小矢、林島（大早）21 19 21－1/21 12 長洪、早（大東）

◇決勝
小矢、林島（大早）21 21－13 15 富山、本（大立）

早大覇權を奪還す

關東學生陸上選手權大會終幕

第二十三回関東学生陸上競技対校選手権大会第三日は八日午前九時五十分から明治神宮外苑競技場で前日同様快晴微風の天候に恵まれて挙行、早大リードの後をうけたこの日、文大の反撃物凄かつたが早大は四百メートルの大勝点、一万メートルの四位入賞で点を稼ぎ最後の千六百米継走にも断然二位の文大を離して覇権を奪還、トラック、フィールドの両種目の優勝を獲得し、立大は惜しくも[illegible]位で二部に転落した

二部は商大が、優勝十一年振りで一部に返り咲くこととなり、本社寄贈のトラック優勝旗を獲得し、三部は新加盟の日体が断然的に勝利を占め二部[illegible]関東と入替ることとなつた

第一部

◇中障碍決勝 ①[illegible]（文）56秒4②[illegible]（早）56秒4③[illegible]（文）56秒7④十[illegible]（文）⑤[illegible]⑥野田（早）

◇走高跳決勝 ①[illegible]（明）1米[illegible]（早）[illegible]（文）1米[illegible]④[illegible]（明）1米[illegible]⑤鈴木（法）1米[illegible]⑥[illegible]（早）1米70

◇槍投決勝 ①杉山[illegible]（早）57米80②[illegible]（文）54米[illegible]③[illegible]（文）54米45④[illegible]（文）52米85⑤井上（日）52米[illegible]⑥[illegible]（早）51米75

◇鉄鎚投決勝 ①[illegible]（文）46米60②坂井（文）44米23③二瓶（早）43米67④朝比奈（早）42米71⑤水[illegible]（日）42米31⑥[illegible]（法）42米01

◇三段跳決勝 ①金山[illegible]（慶）14米77②[illegible]木（慶）14米21③[illegible]（[illegible]）14米14④[illegible]（文）14米[illegible]⑤[illegible]（明）13米95⑥[illegible]野（文）13米83

◇四百米決勝 ①山本[illegible]三（早）50秒4②[illegible]田（文）50秒5③[illegible]（早）50秒5④三木（早）⑤[illegible]⑥大[illegible]（文）

◇棒高跳決勝 ①[illegible]（文）4米10②中村（早）3米90③[illegible]（早）3米90④彫山（早）3米80⑤安納（中）3米80⑥[illegible]（日）3米80

◇八百米決勝 ①[illegible]（文）2分0秒2②[illegible]（日）2分1秒3③[illegible]（文）2分1秒3④[illegible]（早）⑤[illegible]（法）⑥[illegible]（日）

◇二百米決勝 ①山本[illegible]（早）22秒5②[illegible]（慶）23秒0③[illegible]（日）23秒4④[illegible]（文）⑤[illegible]⑥井[illegible]（早）

◇高障碍決勝 ①[illegible]（文）15秒9（大会タイ）②[illegible]（文）15秒6③[illegible]（明）15秒6④[illegible]（早）⑤野田（早）⑥[illegible]木（慶）

◇一万米決勝 ①[illegible]（日[illegible]）32分21秒8②[illegible]（日）32分56秒6③[illegible]（[illegible]）33分0秒8④松下（早）⑥[illegible]（早）⑧杉山（日）

◇千六百米継走決勝 ①早大（[illegible]、[illegible]、[illegible]、三木）3分26秒4②文大3分32秒6③日大3分34秒8④慶大⑤立大⑥中大

◇第一部各校得点 ①早大一一九（競走62、跳投57）②文大一〇七（62、45）③日大五七（40、17）④慶大四二（19、23）⑤明大一九⑥法大二三⑦中大一〇⑧専大[illegible]⑩立大二[illegible]

第二部（決勝記録）

◇中距離 ①[illegible]（商大）[illegible]秒
◇一万米 ①[illegible]（東洋大）31分29秒[illegible]③[illegible]（[illegible]）
◇走幅跳 ①大塚英[illegible]（東大）6

◇八百米 ①山田[illegible]（商大）2分[illegible]③大木（商大）
◇二百米 ①伊[illegible]（商大）23秒7②[illegible]（[illegible]）
◇高跳 ①[illegible]（商大）16秒②永[illegible]（商大）③[illegible]方（大正大）
◇四百米 ①山田[illegible]（[illegible]）53秒②[illegible]（東大）③山[illegible]（日[illegible]）
◇千六百米継走 ①商大（伊[illegible]、中山、永田、[illegible]）3分40秒8②[illegible]（東[illegible]）③永田（商大）
◇槍投 ①山[illegible]（[illegible]）49米[illegible]③東大
◇鉄鎚投 ①[illegible]谷[illegible]（東大）34[illegible]②[illegible]（東大）③小山（[illegible]）
◇三段跳 ①[illegible]（[illegible]）[illegible]②[illegible]（東洋大）③中内（東大）
◇二部各校得点合計 ①商大91②東大[illegible]③[illegible]大68④東洋大36⑤[illegible]28⑥東[illegible]24⑦大正大18⑧[illegible]11⑨[illegible]大8⑩[illegible]5

第三部（決勝一部記録）

◇中距離 [illegible]川[illegible]（日体）60秒5
◇八百米 [illegible]村新（[illegible]）2分7秒6
◇[illegible] 本間[illegible]（拓大）17秒1
◇四百米 [illegible]村新（[illegible]）53秒1
◇走幅跳 [illegible]（日体）6米48
◇一万米 [illegible]（日体）記録なし
◇千六百米継走 [illegible]（川[illegible]、[illegible]水、日[illegible]、江村）3分15秒8
◇鉄鎚投 村上[illegible]三（拓大）20米18
◇槍投 宮本[illegible]雄（[illegible]）45米18
◇二百米 [illegible]（[illegible]）24秒2
◇三部得点合計 ①日体[illegible]②[illegible]16③[illegible]45④拓大30⑤[illegible]22⑥大[illegible]15⑦[illegible]14⑧[illegible]大、東[illegible]13⑩[illegible]大11、[illegible]下略

終戦前後の陸上競技部
― どん底から関東IC2部優勝へ ―

岩　田　正　雄
（昭和23年卒）

昭和12年7月支那事変の勃発以来，日本は年々戦時色が濃くなって来て，あらゆる外来スポーツに対する批判が加わり，昭和16年12月真珠湾攻撃により第2次世界大戦への突入となって，陸上競技も「俵かつぎ競争」…60瓩の米俵を担いで100ｍを走る，軍装（制服で脚にゲートルを巻き，弾倉・銃剣を腰に，小銃を持って）で障害物を乗り越えて走る，「手榴弾投」など『陸上戦技班』への移行が始まった。

それでも昭和17年までは本来の陸上競技大会も行われ，昭和16年（新坂主将）の関東ICでは2部優勝し，17年（三隅主将）には1部でハイハードルで三隅さん，ミドルで黒住さんがそれぞれ5着（当時は6点制で入賞は6位迄）に入賞，4点を取って1部に残留し，最後となった国立グランドでの三商大戦も神戸と大接戦で勝った。だが17年4月，私達が入学した時（当時は旧制で予科3年，本科3年，計6年）の予科の競技部は「予科のどん底」と言われて，成城，成蹊，水戸各高校との対抗戦は全敗であった。

ところが戦線の拡大と共に18年9月に文科系学生に対する徴兵延期が停止され，10月，満20才以上全員に徴兵検査が行われ，身体に故障のある学生を除いて殆どが『学徒出陣』となり，一橋陸上競技部の戦前の活動はここで終止符をうつ事となった。

余談であるが，誰も生きて帰れるとは考えていなかったので，最後に残っていた部費で，伊豆へあてもない旅行に行き「最後のお別れ会」をした。

満20歳以下の部員も，競技会もなく，勤労奉仕などで部活動も出来ないので，器具は1階の倉庫に入れ，鍵が掛けられた。戦時中，この部室も中島飛行機の事務所の一部として接収されていた。

昭和20年8月，敗戦と言う結末で戦いが終わり，生き残った者は早い遅いの差はあれ復員したが，自宅を戦災で失ったり，食糧難や，東京に住む所も無いという惨状で，復学しようにも儘ならぬと言う有様であった。

21年になると接収されていた部室も返還され，次第に旧部員も顔を出すようになり，消息も判明して来て，OBも含めて戦死者の悲報も入ってきた。

米換算一日２合３勺と言う主食の配給も「とうもろこし」や豆・芋などの代替品を含めても満足には手に入らず，勿論，ユニホームもトレパンもスパイクシューズも何もない … これは「飽食，充足」の最近の人達にはどう説明しても理解出来ないと思うが…，そんな中で又，陸上競技をやろうという者が集まって部室の整備と部員の手でグランドの草取りが始まった。この21年秋に関東ICが復活，1／2部なしの合同で行われた。

今の国立競技場は「ナイルキニック・スタディアム」として米軍に接収され，決勝だけが行われ，予選は練馬の中央大学グランドで行われた。一橋は準備不足で、確か家徳さんがただ一人ハイハードルに出場され，惜しくも入賞を逃した。この結果，１点でも取った15校が１部，無得点校は全て２部となった。

この頃は終戦時，海軍兵学校，陸軍士官学校，その他海外官立学校からの自動的編入者もあり，又，復員，復学の時期によって本科卒業の時期が前後し，予科入学の年度通りにはならなかったが，21年は予科16年入学の河鰭主将を中心に，同期の家徳，松本，山沢，22年は主将を17年入学の岩田が務め，マネージャーに吉村，18年入学の高橋，斎藤，遠藤（学連），19年入学の青木，山本，専門部の天明，秋山，増田に，陸軍出身で本科入学の星野，並木などのメンバーであった。

22年5月の関東IC２部は前年度無得点校ばかりだし，競技会が殆どないので他校の情勢が全く分からず予想のしようがなかったが，なんとか40点位取って5／6位ぐらいになれるのではないかと考えていた。ところが，400ｍ以上のトラックが無得点であったにもかかわらず，ハイハードル，ハンマーの上位独占を含む大量112点で，２位紅陵大（拓殖大）42点に大差をつけて２部優勝した。

『予科のどん底から２部優勝』。正に夢のような勝利であった。今の諸君には想像出来ない終戦直後の悪環境下のものであるので，記録の低さには目をつむって貰いたい。当時の２部各校共殆ど同じ状態からのスタートであった筈であり，あとは陸上競技に対する意欲と努力の結果であると思う。一橋が恵まれていたとすれば，諸先輩から受け継いだ国立のグランドと部室があり，倉庫に戦前のハードル，ハンマーなど器具の一部が残っていたことであった。

この年は1部転落の東大戦にも勝った（記録参照）ことも特筆に値する。三商大戦が復活出来なかったのが残念だが，あればこれも大勝したであろう。

戦争の犠牲となられた方々には心より哀悼の意を表し，ご冥福を祈りたい。又，この

頃から，苦労して探し当てた一橋陸上競技倶楽部（OB）の諸先輩が，苦しい戦後の生活の中から，物心両面で貴重なご支援を頂いた事も忘れてはならない。

23年以後，槍の天明，100の渋谷，阿部，ハードルの滝などの逸材が1部で入賞して数年間頑張ったが，所詮実力の差はカバーできず27年に2部になり今日に至っている。

最近，大学が乱立し，特に私立大学が有力選手を集めるなど，目覚ましい程のレベルアップで2部優勝など全くの『夢』であるが，せめて国公立での活躍や対抗戦での勝利を期待して擱筆したい。

学徒出陣と戦後の生活

私自身の例で言えば，神宮球場の壮行会の雨中の行進のあと，思いもかけず海軍に行く事になり，昭和18年12月大竹海兵団入団2ヶ月の新兵教育の上，予備生徒試験に合格，基礎教育の旅順，技術教育の横須賀航海学校と，1年間の将校教育を受けたが，「月々火水木金々」と言われ，24時間体制の厳正苛烈な当時の軍隊の教育・訓練にも十分対応し，19年12月の少尉候補生任官の際ははからずも第1位の成績で，感激の「恩賜賞」を頂いたが，これも長年，陸上競技部のトレーニングで心身共に鍛え，苦しさにも耐え得る下地が出来ていたからと確信する。

新鋭航空母艦「葛城」の航海長付として赴任，20年6月少尉任官，山口県桝井の潜水学校で特殊潜航艇に乗る予科連の教官で終戦，直ちに復員したが，名古屋の自宅は戦災で全焼して知多半島の田舎の疎開暮らし。21年3月やっと南武線の「稲城長沼」の駅のそばに，流しもトイレも戸外で共同，部屋には裸電球一つ，押入の戸もない汚い6畳で，七輪（わかるかな？）で木屑を燃やして自炊。風呂は大家さんの最後の貰い風呂という状態であったが，講義に出ても出なくても，毎日一度は必ず懐かしい部室に立ち寄っていた。

日曜にも，天気が良ければグランドに行って一人でトレーニングし，ストップ・ウォッチを持って走り，タイムも自分で取ったりした。こうした努力が関東IC，7種目入賞の体力にも成績にも繋がったと確信する。「天佑神助」も「棚ボタ」では来ない事だけは銘記されたい。

この頃，学資と生活費の不足分を補う為，アルバイトをしたが，当時，銀座の鳩居堂に事務所があった橘谷先輩が部員を雇って頂いて助かった事がある。その他，就職に至

るまで，倶楽部の先輩方には部員は大変お世話になったことに対し改めて感謝の意を表したい。

終戦直後のエピソード … 関東ICを中心に

① フィールドはとうもろこし畑 … 昭和21年秋，終戦後初めての関東ICは，当時の神宮外苑陸上競技場(現在の国立競技場)が「ナイル・キニック・スタディアム」として米進駐軍に接収されており，決勝だけしか使用出来ず，予選は中央大学の練馬グランドで行われたが，フィールド内は食糧増産の為の畑になっており，投擲競技は他の場所でやった。秋の収穫前で実ったとうもろこしは背も高く，トラックの反対側(バックストレッチ)は全然見えないと言う有様で，4×400のコーナー・トップなどは3コーナーのとうもろこしの陰から出て来るのを待つと言う有様だった。

② ハードルの1点が運命を分けた関東IC1／2部 … 数少ない出場者の内，ジャンプの家徳(S22)は，ハイ・ハードルにも出場したが，予選4位で決勝に残れず，一橋大は無得点に終わり，東大は1名が決勝に残って6位入賞，唯一つの得点1点を取り，総合15位になった。
この結果，東大までの15校が1部になり，一橋大を含む無得点校は全部2部になった。ところがそのお陰で翌22年5月の一橋大2部優勝の栄誉が生まれ，1部無得点最下位の東大と入れ替えになったのだから，全く運命を分けた奇しき1点であったと言うべきであろう。

③ トラック400m以上無得点での圧倒的大量得点優勝(別表戦績参照) … 前21年の無得点校ばかりの集まった2部校。他の競技会も殆ど無く戦前の情報皆無，予想など全くつかぬ中で開催された22年5月の関東IC。蓋を開けて驚いたのは我々だった。
トラックの400m以上は無得点なのに，7種目優勝，ハイ・ハードル1，3，4位，ハンマーの1，2，3位独占，両リレー2位を含み，各種目に満遍なく入賞し，総得点112点(当時は6点制)。2位の紅陵大(現在の拓殖大)の42点を大きく離しての圧勝は夢のような勝利であった。

④ 優勝の印は目録だけ，幻の優勝旗 … 圧倒的な優勝も，優勝旗もトロフィーも無く，貰ったのは目録だけ。その後，現物を見た事もないので，多分そのままでなかったかと思う。

⑤ 7種目出場，金3，銀3，4位1，個人26得点 … とにかく点を稼ごうと，専門外種目の出場も辞さずだが，主将の岩田(S23)100，200 … 予選・準決・決勝，中・高障碍 … 予選・決勝，両リレーのアンカー … 予選・決勝，それに円盤投げと2日間で15回出場，全種目上位入賞という大活躍(8点制なら36点，こんな事はレベルの上がった今では考えられないが …)。今でも毎年の関東ICのプログラムに，2部の200と両ハードルの3種目に歴代選手権者として記載されている。記録だけは低いが，環境の違いであり，当時の一部記録も参照，了承願いたい。尚，個人の賞状も無く，3位まで順位に拘わらず小さなメダル1個で，岩田は貰った6個のうち手元に1個だけ保存，あとは貰わない人に上げた。

⑥ 5歩が3歩に勝ったハイ・ハードル … その22年関東ICのハイ・ハードル。紅陵大，成蹊大など専門のハードラーにまじり，一橋大からは長身の高橋・斎藤に，得点稼ぎで岩田の3人が決勝に残った。だが，テープを切ったのはインターバルが3歩で行けず，5歩でキザンダ岩田だった。おまけに1，3，4位を占めると言うおまけまでついて大量13点を上げ，総合優勝に大貢献。
余談だが前年の家徳さんはインターバルを4歩で行くという器用な選手だった。

⑦ 砲丸投げより飛ばないハンマー … 同じくこの大会の2部では，ハンマーなど持っていない学校もあったらしく，出場者6名，点を取ろうと出場してもターンなど及びもつかず，審判の釜本さんから「砲丸投げより飛ばないハンマーなんてあるか！」と叱られる始末。
余談だが優勝した一橋大の並木でさえ1～2投目ファウルで，ビックリした星野のアドバイスで，3投目はサークルの前にチョコンと置いてベスト6に残り，終われば トップ。

⑧ トラックの端に野菜畑 … 国立の校内にグランドと部室があった事は先輩のお陰で，これも戦後混乱期の2部優勝の一因だが，あの200mあった直走路の両端は職員の

食糧不足を補う野菜畑になっていた。その上，フィールドは勿論，トラックにも雑草が茂っていたが，除草を頼む部費もなく，トレーニングの間に部員自ら雑草を抜いて走路を確保すると言う有様だった。夏など，やっと抜いても一雨降ると直ぐ伸びて大変であった。

そんな苦労の中でのトレーニングも勝利に結び付いたものと思う。今の全てに恵まれた環境の中では想像もつかないであろう。

⑨ 神田の古道具屋で探したスパイク … 戦後，競技再開と言っても，アップシューズもスパイクもない。無論新品などないから神田の古道具屋へ探しに行って，なけなしの生活費の中から，針のチビッたスパイクを見つけて来た。確か先輩の寄付でユニフォームだけ間に合わせて出場したと思う。

⑩ 復活第１回の『一橋祭』… 昭和21年の11月3日，復活『一橋祭』のメイン・イベントとして，陸上のグランドで大運動会を催す事になり，ラグビー部の新井主将と岩田の二人が主になって企画し，陸上競技部部員はその進行や審判などの役員をやった。

専売局に乗り込んで，当時配給でなければ手に入らなくて貴重だった煙草（ピースだったか）の特配を大量に受け，マーキュリーの校章を入れた特製のバックルを作成したのを賞品にしたのが大好評で，各種目の出場者が雲霞の如く殺到し，部員は整理に大童であり，大盛会であったことも一つの想い出である。

以　上

“第一回 三大学陸上競技対抗定期戦記”

（昭和26年7月28日）

学部三年　辰　野　康　夫
（昭和27年卒）

伝統ある三商大戦も学生変革により発展的に解消致すこととなり，その根本的な親善の精神は，一橋大学，神戸大学，大阪市立大学の三大学対抗戦の形式にて引き継がれることになった。

本年はその第一回の顔合せであり，拡大され，充実された二大学との対抗戦の結果は全く予断を許さざるものであった。併し，我々は，命を賭けても緒戦の勝利を期して，キャプテン・秋山を中心に熱，汗，泥と闘いつつ，血みどろの練習を続けて来たのである。が然し運は我に非ず，瀧の欠場，渋谷の負傷と云う致命的な打撃を被るに至った。実力四分，闘志六分の試合を胸に秘めて，東京駅頭を去った我々は，満てたるファイトの中に必勝を期して大阪の一夜を送る。

7月28日，天気快晴，連日の酷暑は，愈々烈しい。マネージャーの心づくしのカロリー料理を食べ，強壮剤を射って直ちに市営運動場に急行する。大阪港に隣するここは比較的涼しい風を享することも出来るが，トラックを地割せしめた暑さを緩和することは出来ない。12時半開始の競技に備えて，体操とアップが終った時，吉村先輩が来られ，益々我々の志気は鼓舞されるのを覚える。一方，マネージャーは選手の渇の補給にとサイダー，トマト，お揚げの入手に転手古舞を演じ，従来に見られ得ない程の，選手，マネージャー，先輩の強靭な紐帯が生成されて行った。こうしたゲマインシャウト的成功は，我々を感激せしめたのみならず，勝利の予想を可能ならしめたものであった。

今日のグランドコンディションは連日の炎暑の故か，トラック，フィールド共に地割する程堅く，余り良好とは云えないが，日米対抗の一週間とて，整備されたグランドは我々を緊張せしめるに充分であった。愈，入場式，了って競技開始に至る。順次，種目別に眺めてみることとしたい。

100M

ベテラン渋谷，阿部出場，併し，大阪・榎原，平野，関西ランキングに位する者なれば予断を許さず，特に，脚を痛めている渋谷が気に懸る。阿部好調断然トップを奪う。

渋谷若干遅れるが平野をぐんぐん引き離しつつこれを追う。阿部独特のピッチとキックで力走，渋谷楽なピッチで美しいフォームを示す。平野，榎原，健斗するも空しく，阿部，渋谷に敗退するに止まった。渋谷ラストのスパートで同時にゴールインしたかに見えたが判定は阿部11秒3，渋谷11秒4，平野光明11秒5，榎原幹雄11秒6となり，1，2位は我々の奪う所となり，正に幸先良好のレースであった。

砲　丸　投

関西インターカレッジ入賞の記録を有する，大阪の弓場をマークすべく，巨漢千葉と快男児，辰野奮闘する。3回目，弓場11Mラインを超す。練習中，素晴らしいタイミングで腰と突出しに成功した千葉は11Mをマークしたが，サークルに入ってから，堅くなったが，アンタイムリーとなり，ノーステップの如きフォームで10M5•60に止まる。辰野も同様，砲丸が滑り，10M50程度でベストフォアー後も調子出ず遂に6回目に至る。堀内先生と吉村先輩のキツイ叱咤の故もあってか，慎重を期してサークルに入る。モーション・ステップぐっと肩に応えた砲丸を臂も折れよと突っ撥ねた一投げ，11M近くに落ちたが弓場をマークし得ず，千葉又，同様最終回目に調子出たらしく，軽々と10M80辺りに落とす。千葉，辰野共にコンディションの調節に一考を要すると思う。

走　高　跳

秋山，富田に一縷の望みをかけるが，日米対抗に出場せし大阪・榎原の実力は，如何なるファイトを以てしても破り難く，富田のシザー，秋山のロール・オーバー共に1M50を超えるに止まった。両者，空間動作に於ける若干の研究で1M60は楽と思われるので，一段の練習が好ましい。昨年，対神戸大戦で活躍した脇，柔軟な体躯と強靱なバネを巧みに利用して，バーに挑むが榎原に敵し得ず1M60を記録して2位に入る。

400M

予想通り，一橋独走の形となり，1，2コーナーを軽く流した渋谷，阿部，バックストレッチ後半辺りよりぐんぐんスピードを増し，神戸，大阪の追随を許さず。神戸の平野暑さの為か，些かバテタ態にて平常の元気の程が窺われず敗退する記録渋谷54秒1，阿部54秒3。記録の低調に止まるは“好敵手存在せず”に求めるべきか。

1500M

新制の万年ホープ森田，一橋ダークホース依田出場。神戸の寺岡，ベテラン大阪の種村を相手にスタート。神戸寺岡断然強く，強気一本の森田これに続く。依田独特の走法にてこれを追う。2周目辺りより，神戸ぐんと引き離し，3•40M遅れて依田，森田の一団，優勝を目された老巧種村往年の元気なく老いたりの感じ。3周目，後半バテ気味の森田を依田追い込みをかけるが成らず大阪の涙ぐましき追走を後にしてゴールイン。神戸の寺岡4分38秒，森田4分44秒，依田？と云うタイムではあるが，森田，依田，一応，余分の修飾語を飛ばして夫々，ホープ，ホースとなったわけである。唯だ4分30秒以内に入るには少なくとも13秒程度のスプリントを有せねばならないので，今一段のスプリントの養成を必要と思う。

高　障　碍

日本ランキングを有する瀧，身体故障の為，出場出来ず最大の希望を富田にかける。大阪の榎原及関西2部インカレ優勝者，神戸の脇に挑む，富田のハードリングは我々の注視の中に開始せられる。テクニシャン富田期待に反せず前半の好調のまま脇を懸命に追うが，遂に7台目，足を触れる。この時，大阪榎原に迫られ，結局1Mの差で3位に入る。タイム脇16秒7，榎原17秒0，富田？

円　盤　投

この得点，予想に於いては3点，辰野，石平で3，4位をせしめると云うわけである。我々の実力に対する不信用の挽回と，マーキュリ立つか，倒れるかの得点的岐路を乗り切るべく，サークルに入る。3校何れも隆々たる体躯，従来の対抗戦に於ける如き安心感は到底生せず。大阪前田の一投げ25•6強力，石平上り気味か，ターンの移動がまずく，円盤に投げられた形で24•5，神戸の両者，荒削りのフォーム乍ら，奇麗なフィニッシュで23•4を投げるがスタミナに欠けている様だ。弓場モーションが強過ぎた為か腰の安定つかずファウル。腕力オンリーの辰野所謂銚子的投法により29辺り，石平調子出ず，全くフィニッシュが崩れ25辺りに止まるが結局ベストに残る。5投目，前田素晴らしいターンとフィニッシュで28ラインを超す。続いて辰野の1投，若干伸びて30ラインに白煙を立たす。6投目，ワンチャンスを逸するか否か，石平，皆凄く，ファイトの権化そのもの。比較的スムースに入ったターンと恐るべき彼の腕力は前田を遥かに

オーバーして２位を奪う。この頃より一橋優勝の萌しが見え始めてきた。

走　幅　跳

連日の炎暑に助走路も地割する始末で，コンディションは良いと云えないが，奇麗に整備された跳躍場は我々に対して快き感じを与える。辰野，渋谷出場，神戸をマークして3,4位を狙う。大阪・榎原，平野は夫々7Mクラスのチャンピォンであると云うことだが，事実平野の助走，空間動作共我々を感歎せしめた程のものであった。前半，平野ファウルを続け，漸く３回目に6Mをマーク，榎原も同様，渋谷脚を気にする為か，助走に全然スピードが乗らず5•75，5•75と我々を冷汗させること２度。３回目5•99という危ない線でライバル森の5•95を超す。辰野，順調に伸び，３回目，強引に6M25をマークする。後半，平野の４回目，ぐんぐんスピードを増す助走と踏切時の完全な程までに脚の伸び切った腰の入れ方は実に素晴らしく前後開脚のフォームで6Mを跳ぶ。辰野これを破らんと猛烈な助走ピットを引っ掻いたまま吹飛ぶ。砂場を2,3度回転して大いに砂を喰う。記録6•36。空間動作の研究を要すると感ずる。５回目，渋谷，軽い助走なるも6Mを跳び我々を唖然とさせる。この時2ミリ程のファウルをしたが，彼の天稟とも云うべきバネと回復後のスピードをマッチせしめたら7Mも間もないと思う。６回目，6M。全回を通じ，大阪榎原精彩を欠いた感じ，オーバーワークの為だろうか。

槍　　投

強豪，大阪の岡野，前田に挑ぶベテラン佐野，剛投阿部に期待はかけられる。走巾跳同様，助走路がスパイクの立たない程までに堅くなって居り，強いフィニッシュは中々困難の様である。前半，阿部，佐野，共に好調。悠々40ラインをオーバーする。神戸振るわず，結局，42を中心に集中した東京，大阪の決戦となる。後半，阿部荒削りのフォームなるも馬力のある助走と，強靭な臂力を以てする剛投は，４回目，45ラインに接近せしめる。佐野，野心的記録をマークせんと大いに奮闘するも彼の技法には余りにも条件の悪い助走路を以てしては如何することも出来ず，42M？の自己最高を出して止まる。岡野不調か4？をマークしたのみにて敗れる。

5000M

直射日光愈々烈しく人間の脳髄より全ての水分を取って了うかと思われる。我々の心配は依田，森田がこの暑さの中で完走し得るかという事であった。前半飛ばし過ぎる森

田に就いては特にそうである。1周目より神戸の寺岡ぐんぐんリードし始め，森田懸命にこれを追う。寺岡3,000Mに至って，断然2位以下を引き離し独走の形となる。この頃，正確なピッチを刻む依田，森田に迫り，抜きつ抜かれつ激烈な競合を演ずる。この一団より100M程遅れて，老巧種村，午前の負傷にも拘らず快走する。4,000を過ぎてから，我ホープ少々バテついて来始め，腿が全然上がらなくなってきた。最終回種村の力走に追いこまれた形となったが，依田，森田，必死の逃げ込みで夫々2，3位に入る。1位の神戸寺岡17分？と云う低調さであるが，皆素質に恵まれるも練習不足という感があった。良い上体とピッチを持っていながら，腿の引上げの点惜しいと思う。依田，森田に就いても，長距離の生命は，ぐるぐる廻りの練習にあることを銘記して，一橋陸上の盲点，長距離に気を吐いてもらいたいと思う。

棒　高　跳

競技も愈々終盤に入り，我々の優勝は明らかになった。併し，圧倒的な勝利を得るか，否かは我々のラストの頑張りに依存するのである。

① 「ポールには神戸の森，大阪の弓場，榎原の出場，焦点は結局，秋山，森，榎原の三巴戦である。」

森，暑さの為か神戸大学正帽を着けたまま跳躍し，鮮やかなフォームを中空に残す。

② 「秋山，自分の2倍もあるポールを持て余し気味なるも，平常見られない程の冷静さと闘志を示し，2M50を悠々とオーヴァー」

バーは2M70に上がる。森，小器用に体を動かすも昨年の如き馬力に欠ける感じ，2回目も僅かの差で落とす。秋山1回目失敗，2回目，助走，突っ込むとスムースに運び，2，30センチ，オーバーするが向きを変えたポールの悪戯にバーを落とされる。3回目，相当の余裕を残してクリアー。結局三巴は2M90のバーに向かって展開される。森，練習不足か，疲労の程を示し失格，秋山愈々，好調。第1回の跳躍にてクリアー。

③ 「榎原，強力なバネと腕力にてポールを攀じ登るという感じなるが良く頑張り3回目巨体をクリアーせしめる。秋山タイトルを奪うか否か。秋山我々の注目の中に3Mをオーバーして彼の最高記録をマークする。」

榎原よく3回目に3Mを超し，両者3M10に進む。1，2回目共に落とし，ワンチャンスに挑む。愛の女神は憎悪の神と変わったか，風とポールの悪戯は秋山のクリアーにも拘らず，バーを落とせしめる。

④「榎原遂に敗れ，秋山タイトルを奪う。」
インシーズンより猛練習を続けてきた秋山に適当なるポールで跳ばせたかったのが我々の心残りであった。

800継走

得点的形勢は我々の圧倒的な勝利の中に進み，愈々，団体的実力を競う800継走に至る。終末の美を飾るべく浪貝，辰野，渋谷，阿部のオーダーでスパイクを履く，榎原に隣して浪貝スタート，前半両者競い合うが後半，浪貝よく頑張り2,3M離して辰野にタッチ，大阪の毛利，猛烈な追い込みをかけるが，辰野前半牽勢し後半のスパートで追随許さず渋谷に渡す。渋谷軽いフォームで1コーナーを過ぎ2コーナー辺りより凄いピッチでスパートぐんぐん引き離しアンカー阿部にタッチ。大阪のアンカー平野の力走も空しく阿部断然たる余裕の程を示してゴールイン。神戸，悪条件を克服して健闘するも大阪に2位を譲る結果となり敗れる。タイム一橋1分38秒，大阪1分42秒，神戸？

かくて第一回三大学戦は57.5：30：25.5と云う圧勝の成績を以て了することが出来た。トロフィ，賞状授与，閉会式も順調に了り，大阪港に夕陽の映える頃，我々は感激と涙の中に部歌を誦するのであった。

“栄冠涙あり”武蔵野の涙は浪速の栄冠となって我々に報いられるに至ったのである。強化合同練習に欠かさず参加された対抗選手の個人的陶冶は勿論，大きな勝因となるものであったが，総得点に於いて2位の大阪を27.5神戸を32リードし，タイトルに於いて6を獲得するという圧倒的な勝利を占め，且つ，選手夫々の大部分が最高記録を出しているという事実は単に個人的な実力以上の力が挙って力あったのではなかろうか。部歴の浅い私は過去の事は知らないが，この2年に於いて，今度程優勝と云う共通目的に自覚と努力を示したことはなかったと思う。試合前の全く悲観的な予想にも拘らず“実力の不足は闘志で”という信念で全員頑張ったこと。そしてこうした選手を心から世話をした涙ぐましきまでのマネージャーの努力，全く一橋アスリートの有する団結の力のみが圧勝を導いたと云えるであろう。

一橋陸上競技倶楽部ハウス建設の経緯

渋　谷　鋭　市
（昭和28年卒）

所 在 地　：　東京都国立市中　175番地
面　　積　：　122坪85
建築面積　：　40坪　木造平屋
着　　工　：　昭和29年4月1日
完　　成　：　昭和29年5月30日
総 工 費　：　土地代　487,206円
　　建築費　500,000円
　　計　　987,206円

昭和20年8月の終戦以後，朝鮮動乱が終わった昭和26年頃から漸く本格的に生活物資が市場に出回るようになってきたが，昭和28～29年頃は依然として苦しい生活が続いていた。その当時，自宅通学か，家からの仕送りが潤沢な学生でなければ，学生がスポーツに取り組むことは容易でなく，下宿生活をしながら運動部活動をするのが無理なため，新入部員獲得も困難であったし，一方，都会の学生は概して運動を苦手とし，地方出身の方が運動経験者が多かったようである。

当時の一橋陸上競技倶楽部は，水上達三（昭和3年卒）先輩を中心に，尾本信平（昭和8年卒），小林主（昭和10年卒），吉見泰二（昭和11年卒）の諸先輩が牽引役となり，学生部員が，部生活を通して有意義な学生生活を送り，社会人として幅広い活躍ができる人間形成に役立てる意義が高かった。特に尾本先輩はイギリスのオックスフォード大のカレッジ生活を高く評価し，全寮制が一番好ましいとの識見を持っておられた。

この様な背景のもとに，倶楽部直営のハウスを持ち，地方出身学生の新入部員獲得を容易にすると同時に，部員の経済負担を軽くし，起居を共にしながらグランドでの陸上競技を含めて人格形成に役立てるため，ハウス建設構想がスタートしたのである。

昭和28年の倶楽部総会で，建設費は部員の寄附金によって捻出することを決定したが，寄附金を集めてからでは建設着手まで時間がかかり過ぎるので，水上先輩の個人保

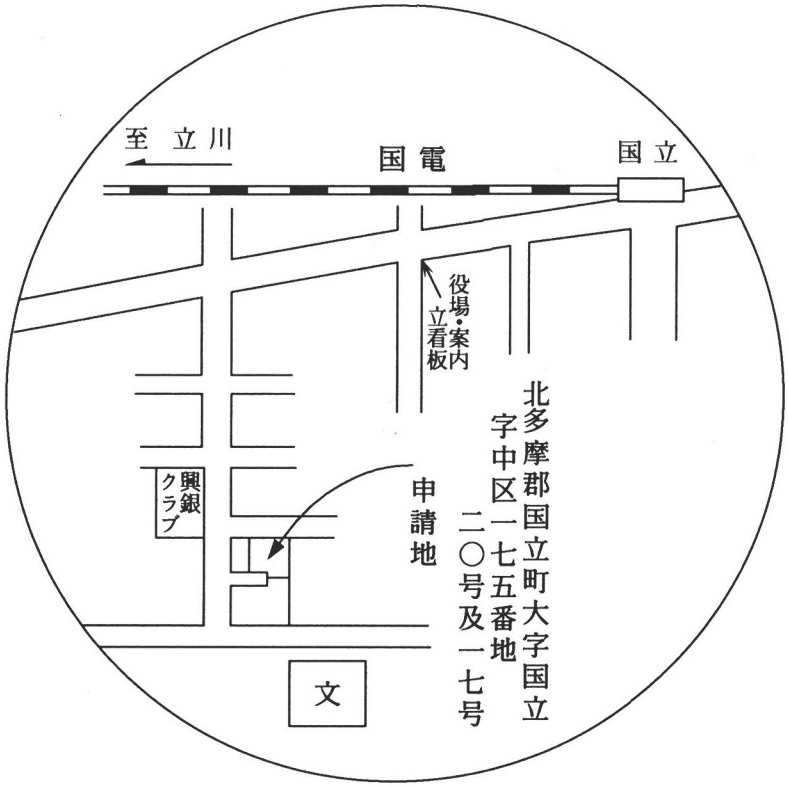
証により競技倶楽部名儀で100万円を日本相互銀行（現在のさくら銀行）から借入れ資金を調達をし，土地建物は任意団体では登記ができないので，これまた水上先輩名儀としたのである。個人名儀で登記すれば，当然固定資産税が水上先輩にかかるのだが，それをクラブが負担した記録はないし，負担するつもりもなかった（？）と思われる。かなり乱暴な話であるが，水上先輩の偉大さもあったし，当時はおおらかなものであった。ハウス建設は，吉見先輩が中心となり，山本省吾（昭和26年卒）先輩が実務担当として大学キャンパス周辺の土地物件の調査を担当した。建物は吉見先輩が取締役経理部長をしていた昭和鉱業株式会社の独身寮（新宿区弁天町）を譲り受けて建築することで決着した。この建物は同社の地方鉱山の事業所の建物を移転した償却済み資産のため，かなり古いものであったが，建物は移築費用だけで済んだのである。

寄附金は昭和29年5月から入金が始まり，総額81万円を集めることができた。建設資金は，同借入金のほかクラブ手持ちの昭和鉱業株式3,000株を売却した30万円を充当し，昭和32年3月，銀行借入金100万円を完済した。

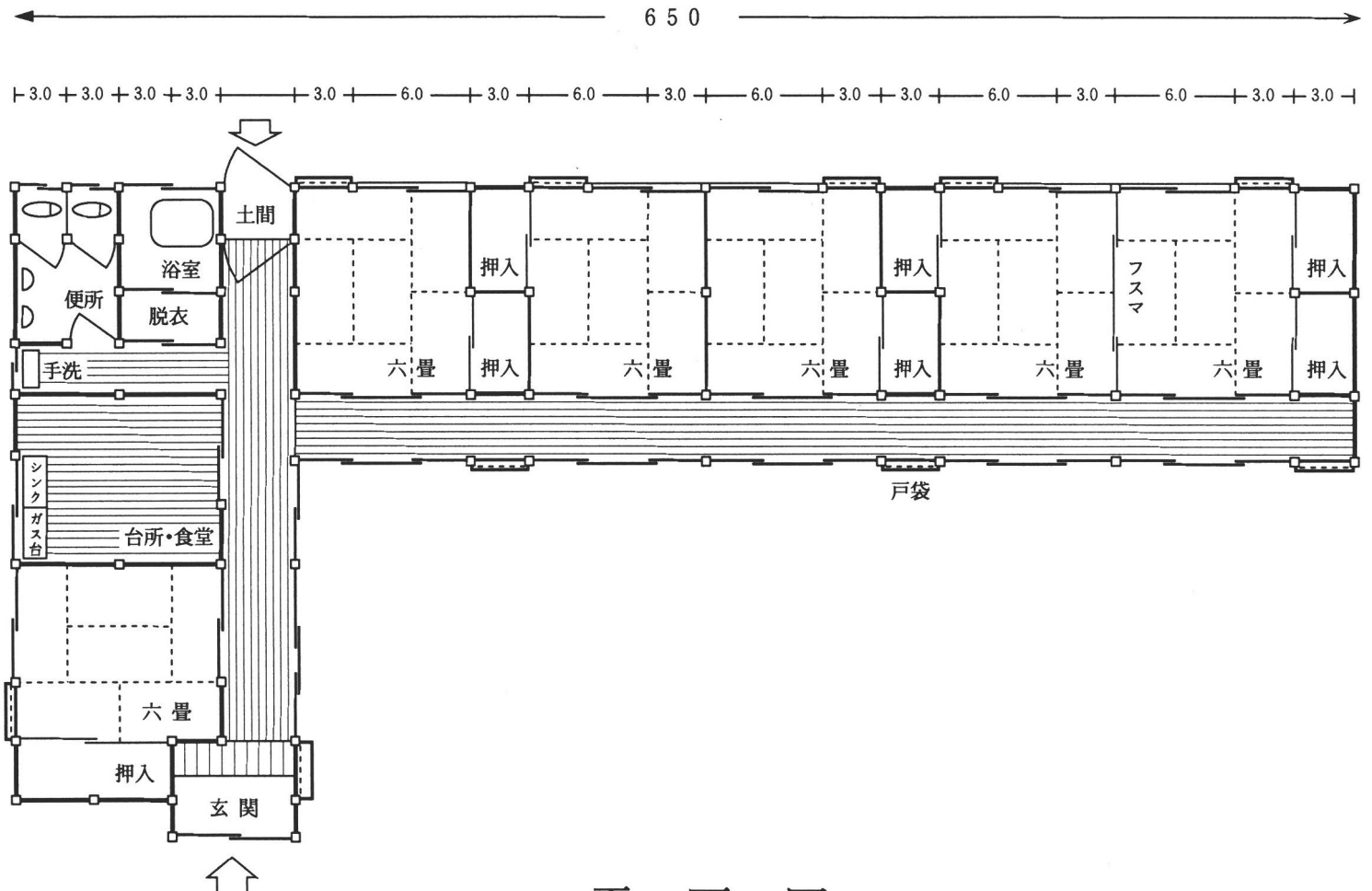
倶楽部ハウスの入居は昭和29年7月からで，昭和鉱業の独身寮の炊事担当であった近藤節さんが住込みで学生の世話役をかねることになった。

倶楽部ハウスから火事を出してはいけないので，大正海上火災㈱に150万円の保険をかけた。

以上が倶楽部ハウス建設当初の経緯である。建設当時の中心推進役であった吉見，山本両先輩が故人となっておられ，たまたま私が昭和鉱業に在籍して，山本先輩（三井金属鉱業）の使い走りをした記憶をたどってまとめたものであることをお許しいただきたい。



案　内　図



平　面　図

四半世紀前のクラブ資金繰

内　藤　藤　三
（昭和38年卒）

別表は，過日クラブ事務室の机の引出しから見つかったメモ帳の一部である。これは，47年にクラブ・ハウスの土地を売却した際，国税局に提出を要するデーターとしてまとめたもので，昭和27•8年頃のハウス建設に当っての資金状態を簡潔に表にしている。

収　入		支　出	
繰　越	295,320円	土　地	487,206円
寄　附	810,300	建　物	500,000
会員借入	90,000	什　器	13,195
		利息・他	119,134
		残　高	76,085
計	1,195,620円	計	1,195,620円

現在の学生並びにこの数年の卒業生諸君にはクラブ・ハウスの名前はすでになじみのない言葉であろうが，戦後の生活困難な折，陸上部の学生が日々の生活に心配することなくスポーツと学問に打込み，且つ，共同生活を営める場の必要性を痛感したOBが，力を合せ奔走した結果でき上ったものである。この合宿所は約20年のライフを終え，建屋が老朽化したこともあり47年に閉鎖され，土地も売却された。その後，これに代るものとして，大学構内への建設等の検討が具体的に進められたが，学校側の許可が得られないまま今日に至っている。また，生活が豊かになった現在，従来と同様の建物をOBがつくる必要性が時代の趨勢と共に消失しつつあることも，ハウス建設が遅れている理由でもある。

さて，この表を補足説明すると，水上会長をはじめ当時の卒業直後のOBに至るまでが大は5万円から小は1千円までの寄附をし，その結果82万円が集った。繰越金の29万円も当然OB会費が蓄積されたものである。それを土地に49万円，建物に50万円を使用したわけであるが，寄附完了までのつなぎ資金として日本相互銀行から100万円，第一銀行から30万円を借用し，完済までには2年の期間を要した。

これを個人負担面から現在の価値に換算すると，例えば，昭和27年の税込現金給与が13,516円，これに対して52年のそれは200,755円であるから，この間の倍率は約15倍となり，従って82万円の寄附金は今日では1,230万円に相当することとなる。当時の5万円は現在では75万円，1千円は1万5千円である。当時会員は現在の約40％，130人程度であったから一人当りでは約10万円の負担をしたことに相当するわけであるが，逆に現在の会員規模を以て同様の熱意を発揮すれば約3千万の資金を徴収することが可能な筈でもある。

先般，吉見副会長，星野幹事長，浜田監督，陶山主将と意見交換した際，学生側の要望としては，タータン走路，排水路設置，砂場作り替え等競技場自体の改善，温水シャワー，ハードルの購入等の設備，器具の改善等々であった。これらは，本来学校側が実施すべきが原則であるが，一方今後のOBが学生との関係に於て取組むべき課題は，これらに対する学校側の計画，予算との接点，間隙にありそうでもある。単に資金的援助をすることのみが陸上部OBの役割ではないが，従来にもます精神的なつながりと共に，今後のクラブが如何にあるべきかについて皆で考え，努力したいものである。

（ATHLETIK EREUND 1978より収録）